

第五章 海軍ト燃料政策

明治三十九年液體燃料採用以前後ニ於ケル油田官營意見

明治二十七八年戰後海軍ニ於テ臺灣油田ノ一部ヲ所管スルノ議ヲ生ジタリシガ幾何モナク民間ニ開放セラレ（第三編第四章參照）又其後石炭調査委員燃料調査委員ニ依リ重油燃料採用ニ關スル調査ヲ進メラルルニ當リ明治三十八年在英藤井造船監督官ハ我國内ノ油田官營ヲ斷行スルノ必要ヲ具申シ其他明治四十一年富安機關少佐亦海軍ノ油田直營ニ關スル意見ヲ提出スル等油田官營ニ依リ軍用燃料ノ供給ヲ確保セントスルノ議ハ重油燃料ノ採用ヲ決セララルル以前ヨリ既ニ海軍部内ノ關心セル處ナリキ而モ當時ニ於テハ之等ノ言議モ未ダ格別ノ進展ヲ見ルコトナクシテ止ミタリ（第三編第一章參照）

然ルニ海軍ノ重油燃料採用初期ニ於ケル重油調達ノ狀況ハ第三編第二章ニ述ブルガ如ク國內ノ需給竝ニ輸送力等ノ關係上一時ニ大量ノ調達ヲナスニハ外油輸入ニ依ルノ外ナク液體燃料供給ノ將來ハ大ニ重要視セララルルニ至レリ

是ニ於テ海軍ハ大正二年五月宮本機關大尉（雄助）ヲ海軍艦政本部出仕ニ補シ同第二部ニ於テ專液體燃料ニ關スル諸般ノ調査ニ從事セシムルニ至レリ

液體燃料調査ノ爲事務職員ヲ置ク（大正二年）

液體燃料採用初期ニ於ケル石油政策具申（油田ノ政府保有又ハ管理海外油田進出案）（大正二三年）

大正二年十一月海軍艦政本部第二部提出「重油燃料ノ供給ニ關スル調査意見」中ニ於テハ燃料重油ニ適スル産油地ハ之ヲ官有トナスカ又ハ條件ヲ附シテ民業ニ委シ以テ平時ノ濫掘ヲ防ギ有事ノ場合ノ豫備油田トシテ保留スベキコト及原油ヨリ重油ノ生産割合ヲ増加スルタメ機械油ノ關稅ヲ低下スベキコト等ニ言及シ「今ヤ良油田ハ軍事的ニ列國爭奪ノ標的タラントス形勢業ニ定マレバ如何トモスルニ由ナシ内國タルト外國タルトニ拘ラズ油田ノ保有ハ蓋シ緊要ノ問題タルベシ」ト結言セリ

更ニ翌大正三年三月鈴木第二部長（富三）「内國重油ノ現況ニ付意見」ヲ伊地知海軍艦政本部長ニ具申スルニ當リ列國ノ石油政策ヲ陳ベ我國ニ於テモ油田ノ買收保存ヲ必要トスル旨ヲ力説セリ又之ヨリ先大正二年二月秀島臺灣總督府海軍參謀長ハ同島ニ海軍油田ヲ定メ海軍自ラ之ヲ採掘スベキ儀ヲ具申シ以テ海軍當局ハ同年十二月宮本機關少佐等ヲシテ臺灣油田ヲ調査セシメ大正三年十二月海軍豫備油田ヲ設定シ後年（大正七年）之ガ試掘ニ着手セルコト第三編第四章ニ陳ブル處ノ如シ

大正三年日本石油會社秋田黒川油田ニ巨大ノ噴油井ヲ得一時重油ノ供給ニ餘裕ヲ示スニ至リシ

臺灣ニ豫備油田ヲ設定ス及試掘（大正三年）
設定、大正七年試掘

外油輸入方針ニ轉ズ
(大正六年)

「軍用石油供給ノ根本策覺」ヲ提
官營、官民合同及海軍製油所設置案
(大正七年一月)

タメ海軍ハ專内地油ヲ購入スルコトナリシガ其後産油ノ増加豫期ノ如クナラズ加フルニ歐州戰局ノ影響モアリテ内地油ノ調達ニ困難ヲ訴フルニ至リシカバ海軍ハ將來ノ準備貯油充實ノタメニモ外油輸入主義ニ轉ズルノ要ヲ認メ油質及地理的竝ニ國際的關係ヲモ考慮シ大正六年先以テボルネオ油ノ大量契約ヲナスニ至レルコト之亦第三編第二章ニ記スル處ノ如シ 蓋シ之等豫備油田ノ設定、外油輸入主義ノ策定ハ何レモ海軍石油政策ノ一部ノ實施ト認ムベキモノナリ而モ艦政局當局ハ海軍擴張計畫ト内外ノ石油事情ニ鑑ミ將來ノ軍用燃料供給ヲ確保スルタメ更ニ一層根本的對策ヲ樹立スルノ必要ヲ痛感シ豫テ考究セル處ニ基キ大正七年一月山口艦政局第四課長(銳)ハ別紙ノ通石油官營、民間會社合同統制竝ニ海軍製油所ノ創設ヲ含ム「軍用石油供給ノ根本策ニ關スル覺」ナルモノヲ提出シ之ニ據リ先ヅ進デ大藏省ト折衝センコトヲ仰裁セリ

軍用石油供給ノ根本策ニ關スル覺

(大正七年一月)

海軍需用ノ石油類ハ燃料重油ヲ主トシ揮發油輕油及各種潤滑油之ニ次ギ目下年額四萬屯ヲ消費スルニ過ギズト雖モ長門級以降ノ戰艦、新巡洋戰艦、巡洋艦、石油專燒驅逐艦潜水艇飛行機等漸次石油燃料ヲ主トシ又ハ專用スル艦艇ノ増加ニ伴ヒ之ニ消費スル油量ハ急速ニ増加シ

大正十二年度ニ至レバ平時一ケ年ニ所要スル石油ノミニテモ約二十八萬屯ニ達スルモノト推算シ得ベク尙之ニ準備燃料油ヲ加フルトキハ最小限ニ計算スルモ年額約三十萬屯乃至三十五萬屯ヲ要求スルニ至ルベシ從テ之ヲ内地石油業ノ實況ニ徴スレバ今ヨリ先ヅ帝國内ニ於ケル生産ヲ増加シ不足ナル油量ハ海外ヨリ吸收スル等ノ方法ヲ講ジ軍用石油ノ供給ヲ調節スルノ根本策ヲ定ムルコトハ寔ニ刻下ノ最大急務ナリトス若シ夫レ之ガ方策ニシテ確定センガ其以後ニ於ケル供給ノ關係ハ單ニ毎年度ニ於ケル豫算上ノ問題タルニ過ギザルノミ前記ノ急ニ應ゼンガ爲此ニ三策ノ考フベキモノアリ

一、帝國内ニ於ケル石油事業ノ施設及經營ノ一切ヲ舉ゲテ之ヲ官營トスルコト

本策ハ在來ノ石油業經營ヲ政府ノ機關ニテ運用スルモノナルガ故ニ内地ニ於ケル油業ノ開發振興ヲ促シ竝ニ外油ノ購入ヲ行フニ極メテ便宜ニシテ軍事上ヨリ考フレバ頗ル理想的ナレドモ其經營ノ範圍國內ニ局限サルルノ感アリ

二、帝國内ノ石油會社ヲ大合同シテ政府ニ於テ一定ノ資金ヲ負擔シ之ニ特別ノ保證ヲ與ヘテ軍用油ノ供給ニ關シ相當ノ條件ヲ定ムルコト

本策ハ其關係頗ル複雑ナルヲ免レザレドモ能ク國內ノ事業ヲ統一シ同時ニ對外ノ起業

ヲ促進スルコトヲ得今後國家ノ油業發展上裨益スル處少カラザルノ利益アリ

三、海軍ニ一製油所ヲ設ケ外國石油會社ト年期ヲ定メテ相當ノ契約ヲナシ現在ノ如ク石油ノ

購入ニ代フルニ原油ヲ以テシ自ラ適當ナル調節ヲナスコト

本策ハ隨時石油ヲ購入スル現時ノ狀態ニ比スレバ其利益大ナルモノアリト雖モ之ガ結

果ハ各石油會社ト利害ノ衝突ヲ來スコトアルヲ遺憾トス

今第一及第二策ヲ共ニ採用シ第一策ハ之ヲ内地ニ於テ實行シ第二策ハ之ニ依テ海外ノ企業ヲ促進スルコトヲ得バ軍事上最上ノ策ナリト雖モ第一策又ハ第二策ノ何レカニ依リ進行スルコトニ決スルトスルモ軍用石油ノ需給ニ關スル根本策ハ先ヅ之ニ依テ確定スルモノト信ズルヲ得ベシ由來此種ノ計畫ハ先ヅ政府ノ意向ノ一定ヲ第一ノ要件トスルガ故ニ適當ノ時機ニ於テ先ヅ以前記ノ要領ニ基キ下地大藏省當局者等ト意見ヲ交換シ漸次之ガ貫徹ヲ期スルノ方針ニ依リ進行セシメラレ可然哉

海軍ノ石油
政策案(官
營、官民合
同)ヲ政府
要路ニ提示
ス
(大正七年
五月)

加藤海軍大臣ハ右提案ヲ認メシガ其關係スル處廣ク重大國策ニ屬スルヲ以テ更ニ艦政當局ヲシテ「軍事上ノ必要ニ基ク石油政策」ヲ立案セシメ同年四月其成案ヲ得翌五月某日閣議後海軍大臣ヨリ親シク之ヲ寺內總理大臣、勝田大藏、仲小路農商務、各大臣ニ手交シテ要旨ヲ説明シ其

考慮ヲ求メタリ而シテ本案ニ於テハ當時石油ト軍用燃料ニ關スル一般ノ理解充分ナラザル實情ニ顧ミ先ヅ之等政府要路ニ對シ海軍ガ石油燃料ヲ必要トスル理由及我國ノ石油事情ヲ詳述シ結局軍事上ノ必要ニ應ズルタメニハ我石油業ヲ此儘單ナル營利會社ノ經營ニ放任スベキニアラズトシ進ンデ之ガ對策ニ關シ左ノ如ク説述セルモノナリ

「……(前略)……以上ノ狀態ニ於テ考フルニ我國ノ石油政策ハ先ヅ我石油事業ヲ統一シ從來燈油ヲ本業トシ燃料油ヲ副業トセシ營利本位ノ石油業ヲ更メテ燃料油ヲ本業トシ燈油ヲ副業トスル國家本位ノ石油業トシ數量調節上ニ必要ナル石油ハ平時努メテ之ヲ外油(外國產原油)ニ求メ同時ニ内國ノ油田ヲ開發シ且ツ適切ニ之ヲ保存シテ能ク限リ戰時用ノ保障ヲ負擔セシメ即チ内地油田ノ即開部ノ產油ヲ制限シテ天然地下ノ貯藏ヲ以テ有事ノ日ノ準備用ノ一部分ニ充テ更ニ新油田ニ進掘シテ如此多數ノ豫備油田ヲ設定シ有事ノ日ニ於ケル應急產油ノ打算ヲ確實ニシ油田ノ潛勢力ヲ保護セザルベカラズ

然ルニ海軍ノ艦船ニ必要ナル重油(燃料油)ハ通例原油ニ含有スル水分一、二割ノ揮發分トヲ除去シタル殘餘ノ油ニシテ尙多量ノ石油製品ヲ得ベキ性質ヲ有スルモノナルガ故ニ我國ノ如キ產油ノ少キ油田ヲ經營スル油業者ニシテ其ノ採掘油ヲ重油(燃料油)トシテ販賣スル

コトハ有利ノ事業ニ非ルガ故ニ強テ燃料油ヲ本業トセシムルコトハ到底不可能ノコトニ屬スルノミナラズ殊ニ前述ノ如ク油田ヲ開發シ適當ニ之ヲ保存スルガ如キハ全ク營利ノ目的ト相反シ尙多量ノ外油ヲ輸入スルガ如キコトモ徒ニ一般石油價格ノ下落ヲ來ス結果トナルベキヲ以テ何レモ營業者ト利害相反スル事項ナリトス

然ラバ我國ノ如キニアリテハ寧ロ國家ノ事業トシテ國家自ラ石油事業ヲ經營スルカ或ハ少クトモ一定ノ方策ニ基キ適當ノ機關ヲ設ケテ之ヲ保護監督スルニ非レバ石油政策ヲ確定シ難シトスル結論ニ達スルコトニ於テ何人ト雖モ異論ナキコトナラント信ズ

更ニ詳言スレバ前記第一案ハ英國内ニ於ケル石油事業ノ施設及經營ノ一切ヲ舉ゲテ官營トナスベシトノ儀ニシテ之ニ依リ在來ノ石油業經營ヲ政府ノ機關ニテ運用シ其利益ノ一部ヲ以テ油田ノ調査油業ノ開發ヲ促シ同時ニ外油ノ輸入石油製品ノ統一ヲ策スルニアリ其第二案ハ帝國内ノ石油會社ヲ合同一体トシ政府ニ於テ之ニ干與シ油業ノ統一ヲ計ルベシトノ儀ニシテ特別ナル會社ヲ創設シ之ニ特種ノ權能ヲ與ヘ國內ノ石油專賣ヲ許シ軍用石油ノ供給並油業ノ統一ニ關シ政府ノ方針ヲ遂行スルノ義務ヲ負擔セシメントスルニ在リ竊ニ稽フニ今ヤ我各石油業者ノ意向モ以上二策ノ何レカニ依ルニ非レバ一朝國家ニ急アルノ時國家ノ必要ニ應ジ難

キコトヲ熟知シツツアリト信ズベキ理由アルガ故ニ此好機ニ乘ジ先ヅ我國ノ採ルベキ方策ガ何レニアルカヲ決定シ之ガ實行ニ向テ猛進セザルベカラズ苟モ石油ノ根本方策ニシテ決定スルコトナカラシカ國防ノ計畫モ何等樹立スル能ハザルベク艦隊ノ補充モ軍器ノ充實モ何ニ向テカ之ヲ用ユルヲ得ンヤ

若シ夫レ前記各案ニ對スル損益ノ計算ハ如何實行ノ方法ハ如何等ニ關シテハ之ガ調査ノ資ナキニ非ズト雖モ要スルニ何レモ可能ノ程度ニアリ更ニ専門家ノ調査ニ須ツトキハ旬日ニシテ之ガ成案ヲ得ルコト難カラザルベシ

今回ノ歐洲戰亂ヲ通觀スルモ各國ガ平時石油ニ對シテ相當ノ方策ヲ樹立シツツアルニ拘ラズ常ニ之ガ準備ニ苦心スルノ狀況ハ歷々トシテ慘澹ヲ極ム況ンヤ我國ノ如キ何等ノ策ノ定マルモノナキニ於テオヤ

機會ハ今ナリ若シ荏苒トシテ現状ニ委スルガ如キコトアラバ他日計畫ノ熟スルトキハ好機既ニ去リテ又策ノ施スベキモノナキニ陥ランコトヲ恐ル

(註) 山口少將當時ノ手記ニ依レバ右海軍ノ提案ニ關シ

大正七年五月七日閣議ノ後大藏、農商務、兩大臣ヨリ海軍大臣ニ左ノ談アリタル趣ナリ

海軍提案ニ
對スル關係
大臣ノ意向
(大正七年
五月)

一、勝田大藏大臣

主旨ハ全部賛成ナレドモ今急ニ之ガ實施ヲナスコトハ困難ナリ（公債發行ヲ要スルタメ）海軍ノ主旨ニ基キ今後研究ヲ繼續セントス

二、仲小路農商務大臣

滿腔ノ同意ヲ表ス秘密ノ趣ニ付鑛山、商工、兩局長丈ケニ内示セリ何レ鑛山局長ヲ出シ海軍ノ當局者ト相談セシムベシ

依テ海軍大臣ハ農商務大臣ニ對シ「軍事上ノ意見ハ全ク記載ノ通ナルモ實施上ノコトニ就テハ素人ノ考ニ付農商務當局ノ研究ヲ希望シタシ」ノ旨ヲ答ヘタリ

又山口中將後日談ニ依レバ右應答ニ基キ崎川鑛山局長農商務大臣ノ命ナリトテ來省セシニ付能ク説明セシ處同局長モ本件ハ差當リ本提案ニ依ルノ外ナカルベシトノコトナリシ由ナリ

尙枋内海軍次官ハ同年五月官房機密第八一九號ヲ以テ外務次官ニ對シ海軍燃料ノ事情ヲ説明シ之ガ對策上海外ノ石油資源ニ付不斷ノ留意ヲ求メタリ
而シテ之等海軍ノ努力ハ當時直ニ格別ノ進展ヲ示スニ至ラザリシガ石油問題ノ重要性ニ關シ關

海軍ハ外務省ニ對シ外國ノ資源ニ留意ヲ求ム
（大正七年五月）

シ關係各省ノ留意ヲ促シ別ニ述ブル處ノ外國會社設備ノ買收及海軍製油所ノ新設、北樺太問題等海軍ノ政策的企畫ノ詮議ニ當リ政府要路ノ理解ヲ促進シ得タルノミナラズ後年石油政策會議ノ端ヲナセルモノト認メラル
斯ノ如ク海軍ハ石油政策樹立ノ機運ヲ促進スルタメ内外ニ説述スル處アリシガ而モ石油官營、又ハ特權會社ノ設立ニ際シ民間石油業ノ收容又ハ統制、就中外國石油會社ノ處置如何ハ蓋シ最困難ノ問題ト豫想セラレタリ

當時我國ニ於ケル代表的外油會社ハ米國系スタンダード會社、英國系ライジングサン會社ノ二ニシテ何レモ我國内要地ニ貯油、供給ノ設備ト多年ノ販賣地盤ヲ有シ殊ニ後者ハ明治四十二年福岡灣口西戸崎ニ製油所ヲ設ケ原油ノ輸入精製ヲ開始スルニ至リシガ恰モ關稅定率法中改正ニ據リ原油關稅ヲ増課セラルルコトナリテ當初ノ打算ニ相違ヲ生ジタルノミナラズ最近ニハ時局ノ關係上タンク船不足等ノ影響ヲ蒙リ充分ニハ右製油所ヲ利用シ難キ實情ニ在リ倫敦ノ右本社モ之ガ處分ニ關シ考慮スルニ至レルモノノ如シ

時ニ海軍ハ大正六年以來ボルネオ油ノ輸入ニ依リライジングサン會社トハ常ニ交渉關係ヲ存シツツアリシ折柄、宮本艦政局員ハ豫テ海軍省ニ出入スル同社職員ヨリ右ノ内情ヲ聞知シ此際海

ライジングサン會社ノ製油所買收問題
（大正七年）

軍ノ決心如何ニ依リテハ右設備ノ買収可能ナルベシト觀察スルニ至レリ
 艦政當局ハ既ニ記スガ如ク石油政策ノ一要項トシテ海軍自ラ適當ノ製油所ヲ有スルコトノ必要
 ヲ主張シアリシガ偶々大正六年度末ノ頃臨時軍事費艦營費ノ狀況ハ主ニタンク船々腹ノ不足等
 ノタメ外油ノ輸入進捗セズ爲ニ豫算ハ差當リ若干ノ餘裕ヲ示ス見込ニアリシ折柄艦政當局者ハ
 右ノ觀察ニ基キ上司ノ内認ヲ得テ大正七年三月ノ頃ヨリ先ヅ非公式ニ會社側ノ意向ヲ探リタル
 結果條件ニ依リテハ其ノ設備ヲ海軍ニ買却スルノ意アルコトヲ知り得タルヲ以テ同年四月本件
 買収ノ方針ニ關シ提案シ省内ノ諒解ヲ遂ゲタリ

是ニ於テ山口艦政局第四課長（事務取扱）及久野經理局第一課長ハ數回大藏省當局ト折衝同省
 次官、主計局長ニ力說セシガ要スルニ當時、時局ノ前途ヲ考慮シ最急速ニ重油タンクヲ入手ス
 ルノ必要ナルコトヲ主トシ茲ニ將來海軍自ラ相當ノ製油設備ヲ有スルノ有利ナルコトヲ詳細ニ
 説明シ且臨時事件以來艦船ノ行動ニ消費セル多額ノ出師準備炭ノ補填ハ石炭ヲ以テセズ將來ノ
 主燃料タル重油ヲ以テスルヲ至當トシ之ガ爲ニ先ヅ之ヲ收容スベキタンクヲ必要トスル理由ノ
 下ニ若シ右買収費ヲ海軍ニ負擔スルヲ要ストセバ臨時軍事費艦營費燃料ノ既定額ヨリ支出スベ
 キコトヲ說ケルモノナリ

買収交渉着手
 （大正七年四月）

「ライ」
 社設備買収
 ニ付大藏省
 ニ説明ス

（註）當時財務當局ノ諒解ヲ容易ナラシメントスル關係モアリテ本件買収ノ第一理由ヲ重油槽
 ノ急速補充ニ置キタルモノナリ
 尙ホ本編纂ニ當テハ後ニ再述スル如ク本件關係ノ公文書ヲ發見スルコト困難ニシテ僅ニ
 右大藏省ヘノ説明ニ關スル覺書「油槽及附屬設備ノ缺陷補足ニ關スル件」ヲ得タルノミ
 ニ付左ニ之ヲ掲ゲ當時ノ狀況ヲ知ルノ參考トス

大正七年五月七日

山口少將

別冊ハ本月七日午前大藏省主計局長ヨリ久野經理局第一課長ヘ電話ニテ過般來ノ懸案事項ハ
 大藏省トシテ詮議ヲ進ムベク又詳細ノ理由等ハ本職ヨリ大藏次官ヘ及久野大監ヨリ主計局長
 ヘノ説明事項ヲ記録シタルモノアレドモ此際主計局長トシテ更ニ本職詳述事項ノ意味ノ一ツ
 書ヲ得立案ノ上ノ參考ニ供シタキ趣申來リタルニ付本件ニ關スル諸覺書等ノ中ヨリ特ニ要件
 ヲ摘要シ許可ヲ得テ同日午後直ニ同官ニ送附シタルモノナリ

覺 (大正七、五、七 山口少將ヨリ大藏省主計局長へ送附)

油槽及附屬設備ノ缺陷補足ニ關スル件

一、海軍需用ノ石油類、燃料重油ヲ主トシ揮發油、輕油及各種潤滑油之ニ次ギ目下年額約四萬餘屯ヲ消費スルニ過ギズト雖モ長門級以降ノ戰艦、新巡洋戰艦、巡洋艦、石油專燒驅逐艦、潜水艦、飛行機等漸次石油燃料ヲ主トシ又ハ專用スル艦艇ノ増加ニ伴ヒ之ニ消費スル油量ハ急速ニ増加シ大正十二年度ニ至レバ平時一ケ年ニ要スル石油ノミニテモ約二十八萬噸ニ達スベク然モ戰用準備ノ年額ニ就テハ更ニ驚クベキ巨額ニシテ現下ノ程度ニ於テ約四十餘萬噸ナルモ大正十二年度ニ至レバ實ニ二百餘萬噸ヲ要スルノ推算ナリ

以上ノ數量ニ對シ海軍ニ於ケル油槽ノ準備其收容量等ヲ考フルニ大正七年度ノ終リニ於テ約十五萬九千五百噸ニ達シ尙大正七年度ヨリ繼續スル水陸設備費ニ於テ決定シタル分重油タンク金參拾貳萬四千圓、ガソリタンク金拾五萬圓ニ過ギズ此費用ヲ以テシテハ大略重油タンク約壹萬五千噸ガソリタンク約八百噸ヲ増加シ得ルニ過ギズ故ニタンクニ對スル目下ノ準備ハ既ニ竣工シタル分未ダ着手セザル分ヲ併セ僅ニ約拾六萬五千噸ニ過ギズシテ前記平戰兩時ニ必要ナル燃料油數額ヲ收容スル計畫ニ對シ其差餘リニ著シキモノアリ抑モ

油ヲ購買スルコトニ就テハ所要經費ノ裕ナル限リ戰時ト雖モ或程度マデハ之ガ調辨難キニアラズト認ムレドモ之ガ貯藏ニハタンクノ準備ヲ伴ヒ其急設ハ決シテ容易ノ業ニアラザルガ故ニ適當ナル機會アリ次第當ニタンクノ増設ヲ計ルコトハ目下ノ海軍政策上極メテ緊切ノコトナリトス惟フニ時局ノ前途ハ逆睹スベカラズ之ガ變化ニ即應センガ爲ニハ之ガ準備ノ一層急ナルモノアルヲ覺ユ

然ルニ横濱ライジングサン石油會社ニテハ現在帝國ノ沿岸各地ニ散在スル同社所有ノタンク及其ノ附屬設備一切ヲ此際帝國海軍ニ對シ賣却スルモ差支ナキ意見ヲ有スル趣ニ付此絶好ノ機會ヲ利用シ速ニ左記ノ通之ヲ買收スルコトトセバ之ニ依テ一時ニタンク量約七萬噸並製油設備ヲ海軍ニ收メ得ルノミナラス殊ニタンク所在地ノ如キモ大体ニ於テ海軍ノ必要ニ合致スルガ故ニ爰ニ幾分燃料油準備上ノ缺陷ヲ補フコトヲ得特ニ時局ニ對シ其利益ノ著大ナルモノアルヲ思ハシム

タンク所在地

タンク容量

野内(青森灣)

六、五〇〇噸

平沼(横濱)

一、一、五〇〇噸

武 豊 (伊勢灣)	五、五〇〇 吨	
野 田 (神 戸)	一〇、〇〇〇 吨	
西 戸 崎 (福岡灣)	三二、〇〇〇 吨	製油設備ヲ含ム
長 崎 (長崎港口)	三、〇〇〇 吨	
釜 山 (朝 鮮)	二、五〇〇 吨	

以上各タンク及附屬設備一切ヲ含ミ所要豫算推算約金四百五拾萬圓ノ見込

(備考)

西戸崎ノ製油設備ハ海軍ガ經濟的ニ多量ノ石油ヲ調辨準備スル上ニ於テ極メテ必要ナルモノニ付タンク買収ト共ニ收容スルヲ要ス

二、西戸崎ニ於ケル製油設備ヲ更ニ詳述スルトキハ次ノ如シ

一、貯油槽

原油及燃料重油ノ貯藏ニ適スル一基四千屯容積ノモノ八個合計約三萬二千吨アリ別ニ輕質油ヲ容ルルニ足ルタンク約十七個三千吨アリテ潜水艇飛行機用燃料油ヲ收容スルニ適ス

二、海陸聯絡設備

前項ノ貯油槽ニハ給油槽船ヨリ直接送受シ得ル如クフローティングパイプノ聯絡施設ヲ完備スルガ故ニ之ガ買収ハ同地ニテ直接原油ノ購入ヲナシ又燃料油ノ供給ニ適ス構内ニハ引込線ヲ有シ博多灣鐵道線ニ連絡スルガ故ニ同所ノ油ヲ適宜各地へ發送スルニ便ナリ

三、製油設備

百屯ノ蒸餾釜八基ヲ有シ別ニ燃料油ノ混合裝置ニ利用スベキ攪拌油槽三基アリ一年約二十萬吨ノ原油ヲ製油シテ約拾八萬屯ノ重油ヲ製スルコトヲ得以上ノ設備ハ他日左ノ如ク利用スルコトヲ得

(イ) 重油混合裝置トシテ其儘利用スルコト

重油ノ混合ニハ必ず加熱攪拌裝置ヲ要シ製油所ニ非ザレバ完全ニ作業スルヲ得ズ内國ノ重油ヲ内國石油會社ヨリ購入スル間ハ特ニ海軍ニ此裝置ヲ必要トセザリシモ今ヤ内地ノ供給殆ンド絶望トナリ主ニ外國油ヲ仰グニ至リテハ南洋及加州、メキシコ等ノ一般市場ニ在ル重油ヲ購入シ海軍自ラ之ヲ混合シテ各種艦船ニ適當ナル品種ノモノ

ヲ製造スルコトハ燃料油供給上ノ一大經濟的事業ナリ

抑モ油ノ濃淡ハ產地ニ依リテ其ノ程度ヲ異ニシ例ヘバ加州重油及メキシコ重油ノ如キハ其ノ價廉ナルモ濃キニ濃ギ其ノ儘燃料油トシテ使用スルヲ得ザレドモ目下購入中ノ南洋ボルネオ油ノ如キ淡質油ト混合スルトキハ適當ナル燃料油ヲ得ベク又我秋田槻木方面新開油田ノ濃質原油モ前記ノ方法ニ依ルトキハ適良ナル燃料油トナシ得ベシ

(ロ) 燃料油製造所トシテ使用シ得ルコト

今後油ノ要求漸次増大スルニ從ヒ重油ヲ購買スルヨリハ廉價ナル原油ヲ外國ヨリ購入シ之ヨリ海軍ニ入用ナルガソリン及石油等ヲ製シ其ノ餘リヲ以テ重油ノ製造ニ充ツルヲ有利ナリトスルコトハ極メテ明白ナル事實ニシテ本製油所ハ此ノ目的ヲ達シ得ベシ

(ハ) 油類ノ品質試験所及改良機關トナシ得ルコト

軍用油類ノ需用莫大トナリ其ノ種類モ亦繁雜ナルニ至テハ其ノ油質試験改良購買檢査ノ統一機關トシテモ相當試験所ヲ要求スルノ機運ニ達シ居レリ今後各種ノ原油ヲ調査シ有事ノ際如何ニシテ之ヲ軍用ニ作製シ且其ノ爲ニ何程ノ生産額ヲ得ベキヤ等ノ研究ヲナシ置クコトハ軍事上特ニ必要ナルコトニシテ西戶崎ニハ之ニ適當ナル設備アリ

三、海軍ニ或程度迄ノ製油設備ヲ有スルコトハ再ビ内地油ニ大噴油等アラザル限り實際上最早民業壓迫ニアラザルコト

海軍ニ用ユル油量多カラズシテ内地油田ニ噴油ノ豊カナリシトキ即チ大正三年頃ナレバ海軍ニ於テ製油所ヲ所有シ製油ヲナスコトハ其理由ナキコトナレドモ現時ノ狀況ノ如ク海軍自ラ計畫ヲナスニ非レバ油ノ供給ヲ得難キニ至テハ毫モ民業壓迫トナル虞ナシ現ニ大正六年度ノ如キハ内地ノ生産約四十萬噸外國油ノ輸入(海軍ニテ購入ノ重油ヲ除ク)約九萬噸内國油ノ輸出約二萬噸ニシテ市場常ニ品不足ヲ訴ヘ海軍ニテハ内地ヨリ全ク重油ヲ購入シ難カリシニ徴シテモ明白ナル事實ナリ

四、本買収ヲ急速決行セザルベカラザル理由ヲ更ニ述ブルトキハ左ノ如シ

(イ) 今假リニタンク増設ニ付大正八年度ニ於テ相當豫算ノ通過ヲ見ルトスルモ由來海軍ノタンク計畫ハ成ルベク僅少ナル費額ヲ以テ可成多量ノタンクヲ製造スルノ主義ヲ執レリ建設地ノ地質等ニ適應シテ鋼鐵製及セメント製ノ兩種ヲ採用シアルガ故ニ若シ鐵材ニ依リ建設ノ計畫ヲナストキハ現下禁輸等ノタメ材料ノ蒐集極メテ困難ニシテ之ガ竣工期スベカラズ又セメント建設ノ方法ヲ採ルトスルモ尙且之ガ材料タル鐵筋ヲ得ルコト

頗ル難キモノアルノミナラズ之ガ工事ニテ一基約一ケ年半ヲ要スルヲ以テ今後三ケ年ノ後ニアラザレバ**タンク**ノ使用ヲ許サザルベク之ヲ時局ノ前途逆睹スベカラズシテ此際極力油ノ購入ヲナシ出來得ル限り明日ノ準備充實ヲ計ラザルベカラザルノ秋ニ際シテノ計畫トナスコトハ到底忍ビ得ベキニ非ルガ故ニ爰ニ臨機應急ノ策トシテ買収案計畫ニヨリ幾分ニテモ軍備ノ缺隔ヲ拒クノ手段ヲ斷行スルコトハ緊急ノコトナリト確信ス

(ロ) **ライジングサン**會社設備ノ一部買収案ニ就テハ極メテ内密ニ協議ヲ進メタル結果僅ニ其端緒ヲ得漸クニシテ之ガ交渉ヲ繼續シツツアルモノナレドモ一方ニ於テ同社ハ此際全設備ヲ舉ゲテ之ヲ支那ニ移轉スルノ計畫ヲモ有シ居ルガ故ニ我回答ノ遷延決セザルニ於テハ其ノ計畫ヲ決行スルヤモ計リ難ク又極メテ秘密ニ聞知シタル所ニ依レバ内地某大資本家ハ倫敦ニ於ケル**ライジングサン**本社ニ對シ將來我國ニ於ケル原油ノ一手供給ヲ申込ミタル趣ナルガ故ニ其計畫ヲ付度スルニ畢竟ハ我國産油ノ貧弱ナル現状ニ鑑ミ一手ニ外油ノ輸入ヲ企畫シ内地ノ石油權ヲ壟斷セントスルモノナルコトハ明カニシテ恐ラシハ更ニ進ンデ**ライジングサン**會社所屬設備ノ買収ヲモ提議セントシツツアルカモ想像ニ難カラザルモノアリ

尙ホ海軍ガ製油設備ヲ買収シ將來ニ於ケル製油計畫ヲ樹ツルコトガ敢テ民業壓迫ニ非ザルコトハ前述ノ通りナレドモ然モ内地ノ石油業者トシテ決シテ歡迎スベキ事項ニハ非ザルガ故ニ本計畫ノ進行ニシテ萬一外間ニ漏洩ヲ來スガ如キコトアラバ極力之ガ妨害ノ策ニ出ルコトハ期シテ須ツベキコトナルヲ以テ極メテ迅速ニ決行シ石油業者ヲシテ一言ヲ其間ニ挾ムノ餘地ナカラシムルヲ以テ最緊要ノ事ナリトス
要スルニ物件ノ賣買ハ一ツニ機會ノ問題ニシテ一度之ヲ失スルトキハ再ビ之ヲ獲ルコト難シ又秘密事項ハ時日ノ經過ト共ニ漏洩シ易キモノナルヲ以テ本問題ハ極力之ヲ迅速ニ決行セザルベカラズ

(下略)

而シテ五月中旬ニ至リ本買収ノタメ結局臨時軍事費艦營費既定額ヨリ支出スルコトニ大藏省ノ諒解ヲ得タルヲ以テ直チニ**ライジングサン**會社ト表テ向キ交渉ニ入レリ本交渉ハ專ラ山口少將ト**ライジングサン**社兒玉利隆トノ間ニ行ハレツツアリシガ同年八月ニ至リ兒玉ハ倫敦本社モ本設備ヲ日本海軍ニ賣渡スノ主義ニ同意シ來レル旨ヲ申出デタリ

又艦政局ハ此交渉中同社ニ對シ右設備ノ買収ト關聯シ將來海軍所要ノ原油重油ノ供給ヲ相當年

間保障セシムルノ儀ニ關シテモ言及セシガ會社側ハ

(一) 製油所其他ノ設備ヲ日本海軍ニ提供スルトセバ其後會社ノ日本ニ於ケル商業上ノ地位ヲ弱ムル虞ナキヤ

(二) 本協定ニ依リ假ニライジングサン社ガ日本海軍ニ要スル石油ノ一手納入者トナルトセバ他日若シ日本ガ石油國有ヲ實行セル場合アリト假定シ會社ノ日本ニ於ケル立場ニ著シキ不利ヲ來スコトナキヤ

等ノ點ニ付最危惧セルモノノ如クナリシヲ以テ海軍側ハ(一)ニ對シテハ會社自身ノ考慮スベキコトナリトシ(二)ニ對シテハ他日若シ帝國ガ石油國有ヲ實行スル場合アリトセバ現ニ海軍ガ計畫ノ事業モ當然該國有事業ニ包括セラルベキモノナリ而モ其場合ニ於テモ南洋油ノ輸入ヲ要スルコトニ依然變化ナカルベキヲ以テ此際會社ガ海軍ト本協定ヲナシ置クコトハ却テ他日ニ於ケル會社ノ基礎ヲ確實ナラシムルモノト謂フベシ今若シ假リニ此原、重油供給契約期間内ニ於テ石油國有ガ實行セラルルコトアリトセバ來社ノ海軍ニ對スル契約上ノ義務ハ自然國有事業ニ引繼ガルルモノト見テ可ナリトノ意味ヲ申聞ケ會社側モ之ヲ諒セリ

ライジング
サン社申出
ノ賣却條件

斯ノ如クシテ交渉ハ概シテ順調ニ進ミ結局會社側ハ

(一) 賣却スベキ物件ヲ西戸崎製油所ノ設備一切並野内、武豊、神崎ノ諸設備トスルコト

(二) 右價格ハ五百參拾萬圓ナルコト

(三) 海軍ニ對シ五ケ年間燃料油又ハ原油ノ一手納入ヲ契約シ其後更ニ五ケ年間ノオプションヲ附スルコト

等ヲ申出ヅルニ至レリ

抑本交渉ニ於テハ戰局ノ爲各種鐵鋼材ノ市價大ニ騰貴セル折柄ナリシヲ以テ右申出程度ノ價格モ非常ニ不當ナルモノトハ認メズ又若干ハ低減セシメ得ルモノト考ヘ交渉シ來レル次第ナル處偶々同年十一月十一日歐洲戰局ハ突如休戰成立シ以來一般ニ軍用資材ノ市價低落シ就中本邦鐵鋼材ノ市價ハ時局一變ニ伴ヒ格別ノ下落ヲ見ルニ至レリ之ガ爲海軍側ハ會社側ニ對シ右價格ノ更改ヲ促スト共ニ兎モ角之ガ買收ノ方針ニ付十二月五日海軍大臣ノ決裁ヲ得タリ而モ減價ノ交渉ハ艦政、經理、兩當局ノ努力ニ不拘進行意ノ如クナラズ(艦政局ノ見込ニテハ結局ハ四百五拾萬圓乃至四百八拾萬圓程度マデハ減價セシメ得ベシトセルモ經理局ハ休戰後ノ時價ニ照シ參百萬圓以内ト評價シタリ)

之ガ處置ニ關シ屢々省内要路ノ間ニ會議セラレシガ此間ニ於テ斯カル高價ヲ以テ舊式ノ設備ヲ買收センヨリハ寧ロソレ丈ケノ費用（前記艦政局見込ノ四百五拾萬圓ヲ目途トス）ヲ投ジテ海軍自ラ新規ニ建設スルヲ優レリトスルノ議モ生ズルニ至レリ

買收交渉ヲ打切リ海軍製油所ノ新設ヲ決ス
（大正七年十二月）

十二月十四日加藤海軍大臣ハ關係局長及山口少將等ヲ招集シライジングサン設備買收ノ案ト及海軍ニテ新設スルノ兩案ニ付討議セシメラレ次デ十二月十六日ヲ以テ新設案決セラレ翌十七日艦政當局ハ會社ニ對シ買收談ノ打切リヲ申渡シタリ

製油工場新設ノ方針決セラルルヤ艦政當局ハ直ニ工場ノ計畫ニ着手シ敷地ノ決定、機械樣式ノ選定等極メテ迅速ニ手配ヲ進メ同月（大正七年十二月）二十七日迄ニ重要機械ノ見積ヲ三井ニ命ズルマデニ取運ビタリ

買收問題ノ成果

本製油工場ハ後ノ海軍燃料廠製油部ニシテ其建設狀況ニ關シテハ別ニ第三編第二章ニ記述ス斯ノ如クシテ當初ノ計畫タル外國會社工場買收其物ハ取止メノ止ムナキニ至レルモ之ガ爲免モ角豫テ海軍ノ必要トセル製油事業ハ創設セラレ後日其活動ニ依リ燃料油ノ調達上一轉機ヲ劃スルコトトナルノミナラズ此ノ買收交渉ニ伴ヒ當時海軍ノ提唱シツツアリシ石油國策（石油官營又ハ官民合同案）ニ外國會社態度ノ探究ニ資シ當局者ハ此點ニ付一層ノ自信ヲ以テ國策ヲ提唱

シ得ルコトトナレリ乃チ本問題ハ海軍燃料沿革上逸シガタキ重要經過ナリシト認ム

（註）一

買收ニ付主務當局ノ希望

ライジングサン西戸崎製油所ハ建設以來既ニ年月ヲ經タル古物ナルノミナラズ本來燈油ノ製造ニ重キヲ置ケル設備ニシテ主ニ燃料油製造ヲ目的トスル海軍ノ要求トハ若干ノ差アリシコト明カナリシガ此交渉開始ノ當時ニ在テハ時局ノ爲鐵材極度ニ拂底シ（前年來米國ノ鐵輸出禁止ノコトアリ）新ニ此種設備ヲ建設スルガ如キハ意外ノ經費ト年月ヲ要シ容易ニ實行シガタキ狀況ニ在リシヲ以テ右ライ社設備ノ買收ハ海軍ノ要求ニ急應スベキ機宜ノ策ト信ジタルノミナラズ艦政局主務課トシテハ此機ヲ逸セズライ社ノ如キ有力外油會社ガ我國内ニ植エ付ケタル重要設備ヲ我國ニ收容シ同時ニ彼ヲシテ原料油ノ供給ニ任セシムルコトハ將來外油會社ノ處分ヲ簡易ナラシメ我が燃料國策上極テ有意義ナリト認メ居リタルヲ以テ這般休戰條約成立ニ由ル時局一變ノ後ニ於テモ右ノ政策的見地ニ於テ設備ノ内容、又ハ價格等ニ對スル多少ノ不滿ハ之ヲ忍デ豫定ノ通買收ヲ斷行シタキ底意ナリシガ未ダ當時ノ情勢ニ於テ此種政策的意義ヲ徹底セシムルコトハ省内ニ於テスラ必ズシモ容易ナラズト觀察セラレタルノミナラズ或ハ之ガ爲ニ折角ノ製油所新設ノ議ニ迄影響ヲ及ボスノ虞ナ

キニアラザリシヲ以テ主張ヲ差控ヘタル實情ナリキ

(註)二

本問題ハ其性質上内外ニ對シ特ニ機密ノ取扱ヲ要シ當事者間ノ口頭商議ニ依リ進捗セシメラレタル場合多シ

而シテ作製セラレタル等ノ少數ノ文書買収提案、大臣決裁書等モ本編纂ニ際シ遂ニ大部分發見スルヲ得ザリシヲ遺憾トス由テ爰ニハ僅ニ前記覺書「油槽及附屬設備缺陷補足ニ關スル件」ト當時艦政局主務課長トシテ専ラ交渉ノ局ニ當レル山口海軍少將ノ手記ヲ原トシ尙艦政局員トシテ在セル宮本機關中佐及編者ノ記憶等ヲ參照シテ經過ノ一般ヲ記述シタルモノナリ

(註)三

尙之ヨリ先本買収交渉ノ着々進行スルヤ其ノ成立ヲ見越シ買収後海軍自ラ製油事業ヲ行フ場合ノタメニ大正七年十一月原油輸入税免除ニ關スル關稅定率法中改正ノ件ヲ大藏省ニ照會シ後年(大正九年)其公布ヲ見ルニ至リシコト本編第二章第一節ニ記述スルガ如シ時ニ海軍燃料油ノ問題ハ前年來漸ク朝野ノ留意ヲ深メ大正八年二月帝國議會ニ於テモ海軍ハ外

石油企業運動續出ス
(大正八年)

油ヲ輸入シテ準備ヲ充實スルノ方針ニ付説明スル處アリシガ此頃ヨリ國內ニ外油輸入販賣又ハ原油輸入精製ノ企業ニ關シ海軍ニ陳情スルモノ續出スルニ至レリ艦政當局ハ之等大小企業運動ノ無統制ヲ憂ヘ之ヲ善導シ内地石油會社ノ統制ヲ計リ之ヲ中心トシテ「ライジングサン、スタンダード」ノ如キ有力ナル外國產油會ヲ提携セシメ原料ノ供給ヲ確保シツツ本邦石油事業ノ秩序アル發達ヲナサシムルヲ以テ豫テ念慮セル國策上一歩ヲ進ムルモノナリトノ信念ニ基キ且特ニ之等ノ問題ニ對スル外國會社ノ動向ヲ考慮シツツ斡旋ニ努メタリ

更ニ石油問題解決策盤ヲ提起ス
(官民合同)
(大正八年六月)

一方徳山ニ於ケル給油設備(當時内外ニ對シ製油設備ナル呼稱ヲ避ケ給油設備トセリ)ハ年初以來工事ニ着手シアリテ近ク一年ナラズシテ其ノ竣工ヲ見ルベキ狀況ニアリ乃チ之等新ナル情勢ニ立チテ更ニ國策樹立ヲ促進スルノ要ヲ認メ大正八年六月山口少將ハ左ノ如ク従前ノ石油官營及石油ノ外石炭ヲモ抱含スル官民合同特權會社ヲ骨子トスル「石油問題解決方案覺」ナルモノヲ提案セリ

石油問題解決方案覺 (大正八、六、二二 山口少將ヨリ加藤海軍大臣ニ提出)

本問題ニ關シテハ客年四月「軍事上ノ必要ニ基ク石油政策」ヲ提案シテ概括的意見ヲ述ベタ

ルコトアリ爾來一年有半其間幾多ノ應急的設備ノ施サレタルモノアリト雖モ夫等ノ諸施設ヲ以テシテハ帝國海軍ノ充實計畫ト伴隨シ得ザルノミナラズ若シ荏苒現狀ニ委スルトキハ我燃料問題ハ遠カラズシテ窮地ニ陥ルノ虞アリ依テ深ク考慮ヲ加ヘ當時ノ提案タル第一案第二案ヲ同時ニ實行シ更ニ之ニ加フルニ石炭問題ヲ以テシ此際根本的ニ燃料問題ノ統一解決ヲ計ルヲ目的トシテ之ガ方法ヲ具陳スルコト左ノ如シ

一、内國ノ油田ヲ適當ニ保存シテ有事ノ日ニ備ヘ、外油ヲ輸入シテ當時ノ需用ヲ充シ併テ必要ナル準備ノ實施ヲ容易ナラシメンガ爲内國油業者及其資本ヲ併セ外國油業者ノ資本ヲ招致シ政府亦之ニ參加シテ官民合同ノ一大石油會社ヲ起スコト

二、前項會社ニ對スル政府ノ出資ハ先ヅ德山製油設備其他ヲ以テシ又外國側ノ出資ハ全資本額ノ二分一ヲ超過セシメザルコト

三、政府ハ會社ニ對シテ一定ノ監督權ヲ有シ且ツ一定ノ利益ヲ保證シ必要ニ應ジテ會社内ニ監督官ヲ置クコト

四、政府ハ戰時必要アル場合ニハ會社一切ノ事業ヲ管理スルコト

五、政府ハ便宜内地鑛區及油田ヲ國有ニスルノ方法ヲ執リ更ニ會社ヲシテ之ガ調査試掘及必

要ナル採掘ヲナサシムルコト

六、會社ハ德山製油設備ヲ繼承擴張シ又參加油業者ノ所有セル製油設備ヲ繼承シ必要ナル原油ヲ輸入シテ石油ノ製造販賣ヲナスコト

七、會社ハ石油燃料ト連係アル煉炭ノ製造ヲナスタメ煉炭製造所及新原炭坑ヲ政府ヨリ繼承シ政府ノ必要ニ應ジ之ヲ擴張シ軍用及一般用ノ燃料統一ヲ計ルコト

八、會社ノ調査機關ヲ完備シ廣ク内外油田ノ調査試鑿等ヲ行ヒ又**コールター**燃料、粉末炭燃料及頁岩油等ノ研究ヲナシ燃料全般ノ改良進歩ヲ計ルコト

以上ハ主トシテ重キヲ軍事上ニ置キテ立案シタルモノナレドモ更ニ一般産業上ノ見地ヨリスルモ我國目下ノ現狀ニ於テ所謂石油政策ヲ確立シ延テ燃料問題ノ統一ヲ計ラントセバ畢竟他ニ格段ナル方法ヲ得ルコト難カルベシト信ズ但シ本案ノ實現ニ就テハ前途幾多ノ困難ノ横ハレルモノアリ特ニ我國ニ於テハ英資**アジアチツク**會社及米資**スタンダード**會社ヲ除外シテ石油問題ヲ議スルコトノ困難ナル事情アルガ故ニ適當ニ此兩會社ヲ誘致參加セシメテ潤澤ナル原油ノ供給ヲ得ルコトハ容易ノ業ニアラズト雖モ尙モ是等ノ困難ヲ打破シテ本案ヲ成立セシムルニ非レバ燃料問題ノ前途ハ遂ニ解決ノ途ナキコトヲ認メ銳意之ヲ促成スルニ於テハ奏效必ズシモ遠キニ

アラザルヲ疑ハズ

(終)

石油企業運
動增長ス
(大正
八年
末)

而ルニ其後民間ノ石油企業運動ハ引續キ增長シ就中同年(八年)十一月ニハ旭石油會社起リ來社ト提携南洋油ノ輸入精製ヲ企テ之ニ對抗シテスタンダード社亦本邦ニ製油所ヲ置カントスルヤノ說モ報ゼラレ稍モスレバ海軍ガ豫テ考慮セル將來政策上好マシカラザル形勢ヲ誘致スルニ至ルナキヤヲ憂ヘシムルモノアリ即チ艦政當局ハ國策樹立ニ關シ農商務省、大藏省等關係當局者ト協議ヲ重ネ尙同年十二月枋内海軍次官ハ農商務次官ニ對シ

「……(前略)……由來本職ハ石油問題ヲ以テ海軍ニ於ケル最重大ナル事項ノ一ツトシ數年來之ガ研究ニ没頭シ殊ニ最近ニ至ツテハ引續キ石油界ニ諸種ノ寒心スベキ出來事頻發シ最早此儘ニ過シガタシ……(中略)……現ニ當省當局者ヲシテ貴省鑛山局長及鑛政課長等ト御相談爲致居候ニ付更ニ同官等ヨリモ御聽取ノ上、此上共御盡力ニ依リ計畫ノ促進ヲ計リ度……」

……(下略)……
趣旨ノ私信ヲ送リ以テ同省ノ奮起ヲ促セリ

而シテ今回ノ提案ニ當リ海軍ハ最近我石油界ニ於ケル無統制ノ狀勢ニ顧ミ此際ハ先ヅ石油官營

ヲ目標トシテ機運ヲ促進スルヲ適當ト認メ右兩省當局者ニモ說述セシガ結局本案ハ國家ノ財務ニ關スル處重大ニシテ大藏省ノ立案ニ委スルヲ可ナリト認メ之ガ資料ヲ同省ニ提供シ相連絡シテ一意其促進ニ努メタリ

(註) 大正七年春ライ社設備買収交渉以來艦政局山口海軍少將ハ同社(兒玉利隆)ト及本年々初以來前記企業運動ト關聯シテスタンダード會社(清岡邦之助)ト機ヲ促ヘ屢非公式ニ折衝意見交換ヲナシ來レル結果我國ガ石油官營又官民合同會社等根本策ヲ樹立スル場合右英米外國會社ヲシテ結局ハ我國策ニ順應シテ專ラ原油ノ供給ニ任ゼシメ得ベキコトニ付相當自信ヲ得ルニ至レリト謂フ

前同大正八年六月提案「石油問題解決方策覺」末段ニ於テ之等外國會社ノコトニ言及シアル所以モ亦此實情ニ基ケルモノナリ

斯カル間ニ議會期モ經過シタルヲ以テ大正九年四月海軍次官ハ海軍省ニ石油政策ニ關スル會議ヲ開キ豫テ下地協議中ノ大藏、農商務兩省當局者ノ參集ヲ求メシガ此會議ニ於テ大藏省理財局ハ豫テノ海軍案ニ基キ石油官營又ハ官民合同會社ヲ内容トスル「我國將來ノ石油政策」ヲ作製提案シ海軍側ト共ニ之ガ説明ニ任セリ次デ翌五月大藏省ニ第二回ノ會議ヲ開催主ニ同省側ノ提

石油政策ニ
關シ大藏省
案作製(石
油官營)
(大正九年
六月)

出セル石油政策關係議題大小十七項ニ就キ意見ヲ交換シタル結果更メテ大藏當局ニ依リ「石油政策ニ關スル調査」ヲ立案セラレタリ要スルニ大正七年以來ノ海軍案ヲ基礎トシ最近ノ會議ニ於テ得タル意見ヲ加味セルモノニシテ結局石油官營案ヲ可ナリトスルニアリタリ

本案ハ海軍ノ見地ニ於テ尙修正ヲ要スル點多カリシト雖モ當時海軍ハ徒ニ當局者間ノ會議ニ日時ヲ費スコトヲ避ケ一日モ早ク本件ヲ閣議ノ段階ニ進ムルヲ以テ問題ノ促進上有利ニシテ詳細ノ討議ハ其上ニ於テスルヲ可ナリト思考セリ斯ノ如クシテ漸ク大藏省ノ石油政策案ヲ得ルニ至レルモノニシテ本案ハ爾後屢々本問題討議ノ資料トシテ取扱ハレタルモノナルヲ以テ之ヲ左ニ録ス

尙當時右石油政策ノ協議會ニ列席セル各省當局者左ノ如シ

- 大藏省 森理財局長 富田同國庫課長
- 農商務省 川久保鑛山局鑛政課長
- 海軍省 山口艦政局第四課長 事務取扱 宮本機關中佐

石油政策ニ關スル調査

(大正九年六月大藏省)

一、我國ニ於ケル石油ノ生産消費

抑モ我國ノ原油生産高ハ從來鑿井法ノ幼稚ナリシ爲メ其ノ年額大正元年頃迄ハ二十萬屯乃至三十萬屯ニ過ギザリシガ大正元年以後ハ所謂ロータリー式鑿井機ヲ使用スルニ至リテ左ノ如ク顯著ナル増加ヲ示セリ

大正元年	二四三、五五五屯
二年	二八四、九一九
三年	三九五、五五五
四年	四三八、三二九
五年	四四三、四五九
六年	四三五、三八九
七年	三七三、八九二
八年	三四三、三〇四
平均	三六九、八〇〇屯

備考 内地、臺灣ノ合計、六石ヲ一屯トス

然レドモ一方本邦石油消費高ヲ見ルニ軍用ヲ除キ普通民間ニ於ケル消費高ノミニテモ内國産石油ヲ以テ其ノ需要ヲ充スコト能ハズシテ毎年左ノ通り外油ヲ輸入シタリ

大正元年	二三三、一七三屯
二年	一九六、五八二
三年	一五〇、五五四
四年	一五三、二三三
五年	一〇四、八一七
六年	九四、四五二
七年	一一六、九〇三
八年	一六五、四六〇
平均	一五一、八九七屯

依是觀之最近八ケ年ノ實況ニ付テ見レバ軍用以外ノ内地消費高ハ約五十萬屯ト見テ大過ナルベシ

次ニ軍用消費狀況ヲ見ルニ我海軍ニ於テハ内地ニ於ケル石油生産ノ貧弱ナル現狀ト有事ノ際ニ必要ナル石油量蒐集ノ困難ナル事情ヲ顧慮シ驅逐艦ノ如キ特殊ノ速力ヲ要スルモノノ外ハ石油石炭混燒ノ方針ヲ執リ努メテ石油ノ消費節約ヲ計リツツアリト雖モ尙現在ノ艦船ニ對シ平時年額十萬屯ヲ要シ又大正十二年度ニ至リ補充計畫ニ依ル艦船ノ全部竣工スルニ至レバ最少限度ニ於テ平時年額約三十萬屯ニシテ戰時ニ於テハ大約平時使用量ノ五倍ト想定シ約百五十萬屯ヲ要スルノ計算ナリ然ルニ内地ノ石油産額ハ民間ノ普通消費スラモ充スコト能ハザルノ實況ナルヲ以テ海軍用石油ハ其ノ平時用ノ分ニ付テハ全部之ヲ海外ヨリノ輸入ニ仰ギ戰時準備ニ付テハ極力内外油ヲ購入シテ漸次豫定ノ數量ヲ貯藏スルノ方針ヲ執リツツアリ

我陸軍ニ於テハ其ノ平時消費高ハ著大ナラズト雖モ其ノ戰時計畫ハ飛行機二千臺、自動車四萬輛ニシテ一年七十萬屯ノ揮發油ヲ要スベシト唱ヘ居レリ

以上ヲ以テ觀之本邦ノ消費高ハ最近ニ於テ普通民間用約五十萬屯、軍用十萬屯合計六十萬屯ニシテ大正十二年以降ハ海軍ノ消費高三十萬屯ニ増加スルヲ以テ民間消費ヲ今日ト同一ト視テ消費合計ハ八十萬屯トナルベシ

二、海外近接油田ノ狀況

(省略)

但シ記載ノ内容ハ支那、蘭領東印度諸島、英領ボルネオ、英領印度露領樺太等近接油田ノ狀況ヲ敍シ結局本邦自給圏内ノ油田トシテ多大ノ望ヲ屬シ得ベキモノナシト云フベキナリトセリ

三、積極的石油政策ノ必要

我國石油ノ産額ガ其消費ヲ充ス能ハズ又海外近接地方ノ油田ニシテ我國ガ平戰時其供給ニ信賴シ得ベキモノナシトスレバ我國ハ積極的石油政策ノ確立ヲ一日モ緩ニスルコト能ハズ今積極的攻策決定決定ノ急ヲ要スル事情ヲ述ブレバ左ノ如シ

(一) 國防上ノ必要

我海軍ニ於テハ平時ノ石油使用量ニ對シテハ全部之ガ供給ヲ海外ニ仰グノミナラズ戰時用準備ニ對シテモ極力外油ヲ購入シテ其ノ貯藏量ヲ増加スルノ方針ヲ實行シツツアルガ大正十二年度ニ至リ補充計畫ニ依ル艦船ノ全部竣工シタル場合ニ於ケル戰時石油消費量ハ前述ノ如ク最小限度ニ於テ年額百五十萬屯ニシテ大正十四年度ニハ二百萬屯同十六年度ニハ三百萬屯ヲ超ユルノ計算ナリ今大正十二年度迄ニ二百萬屯ノ貯藏油ヲ得ルタメ現在ノ收容要

約三十萬屯ヲ控除シ残り百七十萬屯ノ準備ニ對シ要スル經費ハ

イ、油槽百七十萬屯建造費

四二、五〇〇、〇〇〇圓

ロ、給油船十五隻建造費

三〇、〇〇〇、〇〇〇

ハ、重油百七十萬屯購入費

一一〇、〇〇〇、〇〇〇

計

一九二、五〇〇、〇〇〇

之ヲ四ケ年(自大正九年)至同十二年(至同十二年)ニ平均支出スルトシテ毎年度所要經費ハ四千八百餘萬圓ニシ

テ我國財政ノ現狀ニ於テ果シテ能ク其要求ニ應ジ得ルヤ又假ニ經費ノ調達可能ナリトスルモ斯カル短期間ニ能ク諸般ノ設備ヲ完了シ石油ノ搬入貯藏ヲ實行シ得ルヤ否ヤ而シテ又其間外國ノ原油供給地ニ於テ石油輸出ノ禁止等ヲ行フ虞ナキヤ否ヤ等ヲ併セ考慮スルトキハ國防上ノ必要ヨリシテ石油業ニ對シ何等カ斷乎タル措置ヲ採ラザルベカラザル時機ニ逢着セルヲ知ルベシ

(二) 内地産業ノ保護

我國ノ石油生産率ハ海外主要油田ノ生産率ニ比シ遙カニ下位ニ在ルヲ以テ我國ノ石油價格ハ外國ニ比シ甚シク高價ナリ試ニ之ヲ米國ニ比較スルニ原油ノ價格ハ五倍乃至七倍、揮發

油ハ三倍、燈油ハ四倍、輕油、機械油、重油ハ各七倍ニ當レリ其レ丈本邦ノ自動車、石油發動汽船其他ノ諸工場ガ石油消費ノ爲メニ重キ負擔ヲ爲セル譯ナルヲ以テ若シ石油ノ價格ヲシテ今日ヨリ低下セシムルヲ得バ其レ丈自動車、石油發動汽船等ノ發達ヲ促進スルコトヲ得ベキナリ

(三) 内地石油會社ノ保護

右ノ如ク内國ノ石油價格ハ外國ニ比シ數倍ノ高値ナルニ拘ハラズ能ク内國石油會社ガ外國輸入油ト相併シテ其營業ヲ繼續シ得ルハ一ニ内外石油會社ノ間ニ石油輸入量及販賣價格ニ關シ明治四十三年以來一種ノ協定存スル爲ニシテ此協定成立ノ根據ハ明治四十一年以來内外石油會社ノ間ニ激烈ナル競争ヲ爲シテ双方共ニ多大ノ損害ヲ蒙リ結局相互ニ其不得策ナルコトヲ覺リタルト殊ニ外國會社ニ於テ内國石油ニ對シテハ關稅ノ保護アルヲ以テ自ラ非常ノ損失ヲ忍ブニアラザレバ之ヲ壓倒スルコトノ不可能ナルコトヲ覺リタルニ存ス故ニ若シ政府ノ方針ニシテ内國石油ニ對スル關稅保護策ヲ撤廢シ單ニ安價ナル石油ヲ内國ニ供給スルコトヲ目的トシテ外油ノ輸入ヲ獎勵スルニ至ラバ前記協定ハ急チ破ラレ内國會社ハ其存立ヲ失フニ至ルベシ此ノ本邦石油會社ノ不安定ナル地位地ヲ救済スルタメニモ政府ニ於テ

何等カノ措置ヲナス必要存スルナリ

由是觀之我國ノ石油業ハ之ヲ國防上ヨリ見ルモ將又内地産業竝内地石油會社ノ保護上ヨリ見ルモ到底現狀ノ儘放任スル能ハザルヲ知ルベシ

四、石油官營案

果シテ然ラバ將來ノ石油政策如何、吾人ハ將來ノ石油政策トシテ左ノ三案ヲ考ヘ得ベシ

第一案 石油關稅撤廢案

第二案 官民共同出資ノ特權會社案

第三案 石油官營案

今前記三案ノ利害優劣ヲ講究スベシ

第一案 石油關稅撤廢案

本案ハ目下内外石油會社間ニ成立スル協定ヲ破壞スルタメニ政府ニ於テ石油關稅ノ撤廢又ハ將來石油關稅ハ今日以上引上ザルコトヲ聲明シ以テ内地石油ノ供給ハ全部外國ヨリノ輸入ニ仰ギ内國石油會社所有ノ油田ハ全部政府ニ買收シ之ヲ其儘封鎖シテ戰時用ニ保留セントスルモノナリ此ノ方法ニ依ルトキハ一方平時ニ於テ内地産業竝陸海軍ハ非常ニ安價ナル

石油ノ供給ヲ受クルコトヲ得テ其ノ結果自動車、石油發動汽船等著大ノ發達ヲ來スベキノ
ミナラズ内地石油ハ地下埋藏ノ儘戰時用トシテ保存スルコトヲ得ルヲ以テ甚ダ妙案ナルガ
如シト雖モ本案ニハ左ノ如キ缺點アリテ採用スベカラズ

一、外國ノ石油會社トシテハスタンダード、ライジングサン兩社ノ外ニ競争會社アルヲ以
テ内國石油價格ニ付兩社ニ全然死命ヲ制セラルル虞ナシトスルモ石油輸入ニ伴フ利益
(一箇年約三千萬圓ニ上ルベキ見込)舉テ之ヲ外國人ニ壟斷セラルルニ至ルベシ

二、此ノ場合ニ於テモ内地油田ノ調査及試掘ハ之ヲ續行スルコト必要ニシテ其經費少クト
モ一千萬圓ヲ要スベク此財源ヲ得ルコト容易ナラズ

三、石油關稅撤廢ノ聲明ハ本邦石油會社ニ對スル死刑ノ宣告ト同ジク石油株ノ相場ハ忽チ
暴落スベク必ズヤ石油會社側ヨリ激烈ナル反對運動起ルベシ

四、内地封鎖油田ノ貯藏量如何ニ豊富ナリトスルモ戰爭初年ニ於テ一時ニ多量ノ採掘ヲナ
スコトハ技術上困難ナルヲ以テ尙平時ヨリ採掘シテ地上ニ貯藏シ置クコト必要ナリ若
シ之ヲ完全ニ實行セントセバ巨額ノ經費ヲ要スルコト前述ノ如シ

第二案 官民共同出資ノ特權會社設立案

第一案實行不可能トスレバ官營案ニ至ル過程トシテ第二案ノ得失ヲ檢セザルベカラズ
第二案ノ要綱左ノ如シ

一、會社ノ資本金ハ一億參千萬圓トス其官民出資内譯左ノ如シ

先ヅ政府出資トシテ左ノ通り提供ス

海軍省所管徳山製油所

五、〇〇〇、〇〇〇圓

同 石油船十隻(内三隻既成
七隻建造中)

三、〇〇〇、〇〇〇圓

海軍省貯油タンク約三十萬屯

五、〇〇〇、〇〇〇圓

英人經營ノ西戶崎製油所其他ライジング
サン、スタンダード兩會社經營ノ各地
タンクヲ買收ノ上出資其額見積

一、〇〇〇、〇〇〇圓

外ニ運轉資金

二、〇〇〇、〇〇〇圓

計

七、〇〇〇、〇〇〇圓

民間出資トシテ民間會社ノ油田製油所
全部ヲ提供ス其價格

六、〇〇〇、〇〇〇圓

合計

一三、〇〇〇、〇〇〇圓

二、右特權會社ノ組織大要左ノ如シ

- (イ) 民間出資ニ對シ配當保證年八分益金八分以上ニ相當スル場合ニハ政府民間ノ株ニ對シ平等ニ分配ス
 - (ロ) 總裁、副總裁ハ政府之ヲ任命ス
 - (ハ) 理事ハ株主總會ヨリ推薦シ政府之ヲ任命ス
 - (ニ) 石油ノ生産數量及販賣價格ニ付テハ政府ノ認可ヲ受ク
 - (ホ) 本會社ニ對シ左ノ義務ヲ負擔セシム
 - (1) 内國既開油田及精油所ノ整備
 - (2) 貯藏、輸送並販賣機關ノ整備
 - (3) 新油田ノ探查及試掘
 - (4) 豫備油田ノ設定及戰時増産施設
 - (5) 試掘未着手鑛區ニ對スル補償
 - (6) 邦人邦資ヲ主トスル海外石油企業團ニ投資
- 本案ハ政府ノ出資トシテハ現在ノ海軍省所管諸設備ヲ以テスル現物出資ノ外現金トシテハ三千萬圓ニ過ギザルヲ以テ純然タル官營案ノ場合ニ比シ財政上ノ負擔輕ク從テ實

行容易ナルノ長所アリト雖モ左ノ如キ短所アルヲ以テ結局採用スベカラズ

- 一、本來内地油田ハ將來多キヲ期スルコト能ハザルヲ以テ將來ノ石油政策トシテハ海外殊ニ近接地方ノ油田ヲ調査獲得スルコト急務ナリ之ガ爲ニハ半官半民ノ會社ノ方官營ニ比シ好都合ナリト云フ點本案ノ長所ナルガ如シト雖モ官營ノ場合ニ於テハ民間ノ石油會社ヲシテ政府ノ買収ニ依リテ得タル資金ヲ以テ海外油田ノ調査獲得ノ任ニ當ラシメ得ルノ方法アルヲ以テ此ノ點ニ於テモ官營案ニ優レル所ナシ
- 二、會社ノ配當率ハ常ニ會社製品ノ販賣價格ト密接ノ關係アリ而シテ其兩者共ニ政府ノ認可監督ヲ受クルモノナルヲ以テ其決定ニ付テハ政府ハ常ニ進退兩難ノ地位ニ立ツベシ即配當率餘リ高ケレバ民間消費者ニ於テ石油價格ノ値下ヲ要求スベク又石油價格値下ノ爲配當率ヲ切詰ムルトキハ株主側ニ不公平ルベシ此點本案ノ致命的缺點タリ
- 三、内地油田ノ開拓、保存、戰時増産並給油ノ設備等ハ純然タル官營ノ場合ニ比シ徹底的ナル能ハザルベシ

第三案 官營案

第二案ハ前述ノ如キ短所アリトスレバ結局純然タル官營案ヲ斷行スルノ外ナカルベシ而シテ官營案ノ要綱大略左ノ如シ

一、國內ノ石油鑛業鑛油精製業竝之ニ附帶スル事業ニ從事スル會社及個人經營ノ事業施設全部ヲ政府ニ買收スル爲政府公債一億八千萬圓ヲ募集ス
右計算ノ基礎左ノ通

(イ) 本邦ノ民間石油會社二十一社(拂込資本金五九、八〇〇、〇〇〇圓)

買收價格見積

一四五、〇〇〇、〇〇〇圓

(ロ) 内外產原油及石油ヲ加工販賣スル製油業者ノ設備

(投資約一、五〇〇、〇〇〇圓) 買收價格見積

三、七五〇、〇〇〇圓

(ハ) 本邦ニ原油又ハ石油ヲ輸入製造販賣スル外國商人ノ設備一切

(投資約六、〇〇〇、〇〇〇圓)ノ買收價格見積

一五、〇〇〇、〇〇〇圓

(ニ) 以上三口合計

一六三、七五〇、〇〇〇圓

之ニ對スル五分利公債發行所要額(發行價格九十圓)

一八〇、〇〇〇、〇〇〇圓

乃至 二〇〇、〇〇〇、〇〇〇圓

- 二、政府ハ民間ノ石油業全部買收ノ上之ヲ整理統一シ既開油田ノ稼行ヲ繼續シテ毎年約三十萬屯ノ原油ヲ採掘シ更ニ新油田ノ試掘及其ノ一部ノ採掘ニ依リ毎年約十萬屯合計四十萬屯ノ產額ヲ保タシメ其内五萬屯ハ油田地ニテ消費シ残り三十五萬屯ヲ精製販賣ス
 - 三、北米、墨國、蘭領東印度、英領印度、波斯、埃及、ルーマニア、露國等ヨリ原油年額三十五萬屯ヲ政府ノ給油船ニテ輸入シ精製販賣ス
 - 四、海軍省所管ノ德山ニ於ケル燃料油工場ノ全部及同地ノ貯油設備ノ一部ヲ使用シ且ツ海軍省所管ノ給油船十隻ヲ以テ原油ノ運搬ヲ行フ
 - 五、政府ハ製油所特別會計ヲ設置シ其益金ノ大部ヲ以テ第二案ノ特權會社ニ負擔セシムル義務(第二案ノ二ノホ)ト同一事業ノ經費ニ充ツ
 - 六、益金ノ額ニ付テハ製品賣拂價格ヲ大正八年中ノ石油類平均卸値ノ半額ヲ以テ標準トシ一箇年益金見積壹千貳百六拾萬圓ナリ
- 以上ノ官營案實行ニ付最困難ナルベシト想像セララルハ
- 一、財政上ノ問題ニシテ二億圓公債發行ノ困難ナリ併シ買收公債ハ現實ニ市場ヨリ之ヲ募

集スルモノニアラザルヲ以テ各會社各設備ノ買收價格ノ決定困難ヲ別ニシテ買收公債ノ發行自身ハ左程問題トスルニ足ラザルベシ

二、原油獲得上ノ問題ナリ官營ノ場合ニ於テハ多々益原油ノ供給ヲ外國ニ仰ガザルベカラザルガ必要數量ノ供給ヲ常ニスタンダード、ライジングサン兩會社ヨリ受ケ得ルヤ多少疑ハシキ點ナキニアラザルモ本邦ノ輸入量ハ兩會社ノ產額ノ二百分ノ一ニ過ギズ加之外ニモ競争會社アルヲ以テ此點ハ多ク憂フルヲ要セザルベシ

次ニ官營案ノ長所及實行上考慮セザルベカラザル諸點ヲ舉グレバ左ノ如シ

- 一、官營ニ移ストキハ國防上ノ目的ニ副フ様諸般ノ計畫ヲ立テ得ルコト
- 二、利益ヲ全部石油業ニ投ズル故ニ石油鑛業ノ發達ヲ促進スルノ效果アルコト
- 三、價格ヲ低廉ナラシメ得ルコト又燈油ヲ揮發油、機油等他ノ種類ノ油ニ比シテ値下スル等社會政策的ニ價格ヲ定メ得ルコト

四、外國石油會社ガ内地ニ於テ占ムル地歩ヲ奪ヒ得ベキコト

五、石油業ヲ統一シ掘鑿能率ヲ増進シ得ベキコト

併シ官營案ニモ缺點ナキニアラズ左記ハ本案實行ノ場合ニ考慮セザルベカラザル點ナリ

- 一、官營ノ場合ニハ營利心理ノ減退ニ由リ管理並勞動能率ノ低下免レ得ザルコト
- 二、政略ニ利用セラレ易キコト

附表一 石油輸入額

同 一	石油輸入國別
同 二	大正元年以降海軍石油消費高
同 三	海軍石油將來平時使用豫想高
同 四	内外原油價比較
同 五	日米製油品價格比較
同 六	本邦石油鑛業會社
同 七	本邦石油鑛業會社株式相場表
同 八	石油官營ノ場合ニ於ケル收支決算見積
同 九	石油官營ノ場合ニ於ケル收支決算見積

(編者曰、右表中自一、至四表ハ記載ヲ略ス 五、以下ハ別紙ノ如シ)

附表第八

本邦石油鑛業會社株式相場表 (現物相場)

社名	一株拂込金額		大正八年末	本年最高	最近(六十五日)
	(最近)				
日本石油會社	舊株	五〇、〇〇	一三七、六〇	一四七、〇〇	九六、〇〇
	新株	一二、五〇	六八、六〇	八三、〇〇	三八、〇〇
寶田石油會社	舊株	五〇、〇〇	一三九、三〇	一八六、〇〇	一〇二、〇〇
	新株	三〇、〇〇	八一、一〇 (一一、五〇拂込)	一一三、五〇 (一一、五〇拂込)	六八、〇〇
日寶石油會社		五〇、〇〇	三、三〇	三、三〇	八、〇〇
東洋石油會社		三〇、〇〇	三、〇〇	三、〇〇	二、五〇
出羽石油會社		一二、五〇	五、五〇	五、五〇	六、〇〇
大日本石油鑛業會社		一二、五〇	六、〇〇	六、〇〇	七、〇〇
明治石油會社		五〇、〇〇	六、〇〇	六、〇〇	一七、〇〇
石油興業會社		一七、五〇	一〇、〇〇	一〇、〇〇	一三、五〇

出羽石油株式會社	三、〇〇〇、〇〇〇	七五〇、〇〇〇		
大日本石油鑛業株式會社	七、五〇〇、〇〇〇	一、八七五、〇〇〇	七年度産額	四、〇〇〇石
太陽石油株式會社	三、三〇〇、〇〇〇	三、三〇〇、〇〇〇		
越後石油合資會社	二〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇		
帝國石油株式會社	六、〇〇〇、〇〇〇	二、四〇〇、〇〇〇	七年度産額	二、〇〇〇石
明治石油株式會社	八〇〇、〇〇〇	八〇〇、〇〇〇	同	五、〇〇〇石
新寶石油株式會社	一、〇〇〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇		
石油鑛業株式會社	二〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇		
合資會社鈴木商店	一〇〇、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇	七年度産額	五、〇〇〇石
日本アスファルト工業株式會社	一五〇、〇〇〇	一一二、五〇〇		
計	九一、九三〇、〇〇〇	五九、八〇〇、五〇〇		

備考 以上ハ鑛區ヲ有スルモノノミノ調査ニシテ其資本及拂込額ハ會社要録ニ依ル

附表第九

石油官營ノ場合ニ於ケル收支計算見積

- 一、資 金 二億圓
- 二、歲 入 一億一百四十八萬六千二百二十五圓
- 三、歲 出 八千八百八十七萬二千圓
- 四、益 金 一千二百六十萬八千六百二十五圓
- 五、生産物賣拂價格、大正八年中ノ石油平均卸値ノ半値ヲ以テ標準トス

會計内譯

- 作業收入 一〇一、四八〇、六二五圓
- 生産物賣拂代 一〇一、一八〇、六二五圓

種類	數量	單價	金額
揮發油	二、二七五、〇〇〇函	七、〇〇	一五、九二五、〇〇〇圓
燈 油	三、四一二、五〇〇函	四、〇〇	一三、六五〇、〇〇〇圓

輕 油	四、五五〇、〇〇〇函	二、八〇	一二、七四〇、〇〇〇圓
機 械 油	四、〇九五、〇〇〇函	四、六〇	一八、八三七、〇〇〇圓
燃 料 油	一、三六五、〇〇〇石	一二、〇〇	一六、三八〇、〇〇〇圓
容 器	一四、三三二、五〇〇個	一、六五	二三、六四八、六二五圓
雜 收 入	三〇〇、〇〇〇圓		三〇〇、〇〇〇圓
物品拂下代	三〇〇、〇〇〇圓		三〇〇、〇〇〇圓
作 業 費	八八、八七二、〇〇〇圓		八八、八七二、〇〇〇圓
俸 給	二、〇〇〇、〇〇〇圓		二、〇〇〇、〇〇〇圓
事 業 費	七五、九一〇、〇〇〇圓		七五、九一〇、〇〇〇圓
公債利子	一〇、九六二、〇〇〇圓		一〇、九六二、〇〇〇圓

(内譯省略)

精油精產品内譯

輸入原油 三十五萬噸

内地原油 三十五萬噸

合計原油七十萬噸(四百五十五萬石)ヲ精製シ左ノ製品ヲ得ルモノトス

品名	原油ニ對スル%	製出高(石)	同	上(函)	平均油價		總價
					内國八部	本見機	
揮發油	一〇	四五五、〇〇〇	二、二七五、〇〇〇	六九	三五	一五、九二五、〇〇〇	
燈油	一五	六八二、五〇〇	三、四二二、五〇〇	三九	二〇	一三、六五〇、〇〇〇	
輕油	二〇	九一〇、〇〇〇	四、五五〇、〇〇〇	二八	一四	一二、七四〇、〇〇〇	
機械油	一八	八一九、〇〇〇	四、〇九五、〇〇〇	四五	二三	一八、八三七、〇〇〇	
燃料油	三〇	三六五、〇〇〇		三三	一二	一六、三八〇、〇〇〇	
損失	七	三一八、五〇〇					

海軍擴張案
成立シ燃料
問題益々重
大トナル
(大正九年
七月)

恰モ大正九年七月第四十三議會ニ於テ愈々多年ノ問題タリシ海軍擴張計畫(所謂八八艦隊)成立シ大正十六年度中ニ其完成ヲ豫定セラレ之ニ伴ヒ燃料問題モ一段ト重要視セラルルニ至リシガ之ニ先チ中里軍令部第二班長ハ「再燃料國策ニ就テ」ナル意見ヲ海軍軍令部長ニ提出セリ(同官ハ大正八年六月ニモ同種ノ意見ヲ提出セルコトアリ)本意見ニ於テ同官ハ大正十六年度艦隊補充計畫完成ノ曉戰時第一年ノ重油所要高約三百六十萬屯第二年以降年額約二百六十萬屯

島村軍令部
長意見
(大正九年
七月)

ヲ要スル見込ナリトシ之ガ對策トシテ(一)調査機關ノ設置、(二)根本方針ノ確立、(三)實行方針ノ樹立(石油官營、特權會社設立、海軍所有鑛區開發、代用燃料工業ノ獎勵)ニ關シ言及セリ島村軍令部長ハ之ニ對シ左記ノ通り親シク自己ノ所見ヲ附加シテ加藤海軍大臣ニ移牒セリ
(大正九、七、五 海令機密一三七號)

「戰時ニ應ズル重油供給ノ途目下ノ如ク不確實ナル狀況ニアル限り毎年度作戦計畫ノ如キハ全ク紙上ノ空計畫ニ過ギズト云フベク又此問題解決セザル限りハ目下進行中茲ニ議會提案中ノ海軍充實問題ノ如キモ殆ド其意味ヲナサズト云フベク故ニ此問題ハ今日ニ於ケル國防上ノ最大急務ノ一ツトシテ銳意解決ニ努メザルベカラズ……(中略)……但本職ハ該問題解決ノ大方針トシテ諸種ノ困難ヲ排除シ努メテ速ニ本邦及臺灣(樺太北部モ永久占領ト假定シテ之ニ準ジ)ノ石油坑區ノ國有ヲ斷行シ大規模ノ下ニ着々試掘採油ノ途ヲ講ズルヲ以テ最上ノ策ナリト信ズ依テ卑見ヲ併セ右移牒ス」

(註) 燃料問題ニ關シ軍令部ヨリ海軍省へ意見ノ移牒ハ一再ニ止マラザルモノ々々之ガ記述ヲ略ス

又大正九年七月第四十三議會ニ於テ衆議院ハ議員坂本素魯哉同高野毅等ノ提出スル處ニ基キ燃

衆議院燃料
政策ニ關ス
ル建議案ヲ
可決ス

(大正九年
七月)

軍需局ヲ置
ク

(大正九年)

大藏省ノ提
案ハ閣議ニ
至ラズシテ
止ム及其事
情

(大正九年)

料政策ニ對スル建議案「政府ハ速ニ燃料政策ヲ樹立スベシ」ヲ可決セリ

海軍省内ニ於テモ同年九月軍務局提案ニ基キ非公式ニ燃料研究會ナルモノヲ設ケ軍務、軍需、
兩局員及軍令部參謀等會合、主ニ當面ノ貯藏、調達等ノ事務ニ關シ連絡協議セリ

而シテ海軍ハ此間別ニ詳記スル如ク外ハ自ら北樺太油田ノ開發ニ進出シ或ハ海外油業ニ對スル
邦人ノ運動ヲ援ケ内ハ海軍製油事業ノ創設油頁岩其他代用燃料ノ實驗等現ニ着々政策ノ一部實
施ニ努ムルト共ニ官制沿革ニ記スガ如ク大正九年九月海軍省ニ軍需局(局長山口海軍少將)ヲ
置カレ之等膨脹セル海軍ノ燃料行政ハ舉テ同局ヲシテ所掌セシメラルコトナレリ

然ルニ石油根本策ノ審議ハ前記ノ如ク既ニ大藏省當局ノ立案成リ海軍トシテモ深ク其進展ヲ期
待シ努力セルニ不拘其後大藏省ニ於ケル通過意ノ如クナラズ遂ニ閣議提出ニ至ラズシテ止ミタ
リ

(註) 本案ガ遂ニ大藏省ニ於テ成立ニ至ラザリシ事情ニ關シテハ公文ノ據ルベキモノナク之ヲ
確知シガタキモ當時軍需局長タリシ山口中將後日談ニ依リ案ズルニ大藏省ニ於ケル主務
者タル森理財局長中途他ニ轉ジタルタメ進行停滯シ高橋大藏大臣ニモ充分ノ諒解ヲ得ル
ニ至ラズシテ議會期ニ入りタルモノト考察セラル

尙後年(大正十四年)帝國議會ニ於テ石油問題ニ關スル副島貴族院議員ノ質問ニ對シ
高橋農商務大臣ノ答辯ハ以テ本問題ニ對スル同官ノ所見ノ一端ヲ知ルヲ得ベキニ付左
ニ其ノ一部ヲ摘記スルコトトス蓋シ右高橋是清氏ハ大正二年以降屢々臺閣ニ列シ就中
海軍ガ石油政策ヲ他省ニ提唱シ始メタル大正七年以後ニ於テハ本問題ニ直接關係アル
大藏大臣(大正七年九月ヨリ同十一年六月)農商務大臣(大正十三年六月ヨリ同十四
年四月)ニ在職スルコト比較的長期ニ及ベルガ故ニ此間燃料問題ニ對スル政府ノ態度
ハ同官ノ所見ニヨリ影響セラレタルコト尠カラザリシモノト思惟ス

大正一四、二、三 第五十議會ニ於ケル副島伯ニ對スル高橋農相答辯摘要

「……………前年私が大藏當局デアツタ時ニモ海外ニ善イ油田ガアルカラ國ガ補助シテモコト云
フモノハ獲テ置カネバナラヌト云フ様ナ御意見ガアツタ併シ國トシテ會社ヲ補助シテ外國ニ
其權利ヲ得セシメルト云フ上ニ於テハ其モノガ最早疑ノナイモノデ確實ナモノデアルト云フ
コトノ安心ガナケレバ國民ニ向テ國ノ費用ヲ以テ或會社ノ事業ヲ助ケルト云フコトハ言ヒ出
シ得ナイコトデアル……………又我國ノ油田ヲ國營ニテ開發シタラ可ナリト云フ御意見ノ様デ

アルガ凡國營ニスルト云フコトニナレバ何か其處ニ目的ガナケレバナラヌ……………不幸ニシテ我國ノ今日ノ油田ノ状態ニ於テハ國ガ之ヲ專賣ニスルト云フ迄ニハマダ決心ガ付カナイ況ンヤ外國ニ於テ物ニナルカナラヌカ判ラヌモノニ對シテ國費ヲ使テ此仕事ヲ試ミルト云フコトハ是ハ國民ノ許サヌ處デアル、コト云フ仕事ハ固リ云フ迄モナク營利事業トシテ資本案ノスベキ仕事デアル……………ツレカラ縦ヘバ又國ガ國費ヲ投ジテ外國ノ油田ガ日本人ノタメニ得ラレタト假定シテモ是ハ其萬一ノ場合ニハ戰爭ノ場合ニ於テ果シテ之デ海軍ガ安心ガ出來ルカドウカ……………何レノ國デモ外國ニ出ル石油ヲ目當テニ國防上之ハ安心シテ居ル譯ニハ行カヌト私ハ考ヘル……………シテ見レバ平時ニ於テ必ラズ之ヲ國ガ專賣若クハ國營トシテ大ナル國費ヲ投ジテ何デモカンデモ油田ヲ持タナケレバナラヌ必要ガアルカ國民ノ消費スル處ノモノデ國內ニ産出スルコトノ出來ヌモノハ獨リ石油ノミナラズ大低ノモノハ皆外國カラ輸入シテ來ルノデ國民ハ何等不自由ハ感ジテオラナイ……………伯爵ノ御心配ノ點ニ付テハ私ハ全ク御同感デアリマスガ如何セン我國ノ石油産出ノカト云フモノガ無イ國デアツテ今日迄之レバカリニ國費ヲ以テソノ我國ノ石油自給策ヲ立テルト云フ様ナコトハナカナカ政策モ立タヌノデアル 已ムヲ得ヌコトト考ヘマス」

農商務省ニ於ケル石油政策協議會
(大正十年)

大正十年初頭第四十四議會ニ於テモ石油政策ニ關スル應答アリ議會後山口軍需局長ハ上司ノ旨ヲ承ケ田中農商務次官(隆三)ヲ訪ヒ再ビ石油政策ニ關シ説述スル處アリ同省ニ於テモ之ヲ諒シ研究ノ末同年六月二十四日ヨリ翌七月中旬ニ亘リ農商務次官ノ主宰ニテ三回ノ石油政策協議會ヲ開催シ主トシテ前年ノ大藏省當局ノ立案ニ基キ官民合同會社案及官營案ニ付意見ヲ交換セリ當時此會議ニ參與セル諸官概ネ次ノ如シ

- 農商務省 田中次官、崎川鑛山局長、同鑛政課長、吉村燃料研究所長、大濱書記官
- 陸軍省 大橋大佐(兵器局)
- 外務省 堀内書記官、武者小路書記官
- 大藏省 富田書記官
- 海軍省 山口軍需局長、宮本機關中佐

其後更ニ之ト併行シテ小委員會ヲ置キ農商務省鑛山局長、鑛政課長、大濱書記官、大藏省、青木書記官、中島專賣局事務官、海軍省、宮本機關中佐等ニ依リ同年十二月迄數回ニ亘リ石油專賣ノ各種様式ニ付審議討究セシメ十二月(大正十年)下旬ニ至リ農商務次官主宰ノ政策協議會ヲ開キシガ海軍ヨリハ中里軍需局長(十二月山口前局長ト交代)眞木同第二課長宮本同局員參

石油專賣案
(大正十年十二月)

加シ主トシテ右專賣案ヲ附議スルニ至リシガ恰モ議會會期ニ入り格別ノ進展モナク中止セラレタ

リ
當時右小委員會ニ於テ得タル專賣案ナルモノノ要旨左ノ如シ

(註) 議會終了後ニ於テハ恰モ華府會議後極度ノ節約整理時代ニ處シ海軍モ軍備縮少當面ノ處
置ニ没頭セル實情ニシテ自然石油政策問題モ一時其ノ歩ヲ緩ムルノ形トナリ大正十一年
ヲ經過セリ

石油專賣ノ種類及得失

第一 原油採掘及輸入專賣

政府自ラ油田ヲ買收シ原油ノ採掘ヲ獨占シ又ハ原油ヲ輸入シ之ヲ民間製油會社ニ販賣シ精
製販賣セシメ精油ノ輸入ヲ禁止ス

第二 原油供給專賣

原油ノ採掘ハ之ヲ民間會社ニ許シ政府ハ單ニ原油ヲ收納又ハ海外ヨリ輸入シ其儘販賣シ又
ハ民間製油會社ヲシテ精製販賣セシム此場合ニ政府ニ於テ民間會社ノ原油ノ採掘ヲ制限ス
ルコトアルベシ

第三 石油精製專賣

原油ノ採掘ハ之ヲ民間會社ニ許シ政府ハ原油ヲ收納又ハ海外ヨリ輸入シ政府自ラ之ヲ精製
販賣シ及精油ヲ輸入販賣ス此場合ニ於テモ政府ニ於テ原油ノ採掘ヲ地域的及數量的ニ制限
スルコトアルベシ

第四 精油販賣專賣

原油ノ採掘、製油共ニ民間會社ニ許シ政府ハ精油ヲ收納シ又ハ之ヲ外國ヨリ輸入シ其販賣
ヲ獨占シ民間ニ於ケル原油及精油ノ輸入ヲ禁止ス而シテ政府ハ必要ニ依リ原油ノ採掘ヲ地
域的數量的ニ制限シ又ハ製油ヲ數量的ニ制限スルコトアルベシ

第五 全部專賣

最完全ナル專賣又ハ簡單ニ石油官營ト稱スベキモノニシテ原油ノ採掘製油ノ精製販賣ノ全
部ヲ政府ニ於テ獨占實行スルモノナリ

右各案ノ比較

第一 原油採掘及輸入專賣

長所

- (イ) 政府自ラ油田ヲ所有採掘スルヲ以テ必要ノ資金サヘ備ハラバ石油政策上最必要トスル
- 一、内地既開油田ノ整理 二、貯藏輸送機關ノ整備 三、新油田ノ探查及試掘 四、豫備油田ノ設定及戰時増産施設等ヲ行フニ便ナリ
- (ロ) 諸地方ニ散在セル各種ノ油田ヲ政府ニ於テ劃一的ニ稼行スルヲ得ベキガ故ニ比格的經費ヲ節約スルコトヲ得ベシ此ノ點ハ既ニ本邦ニ於テ實行シツツアル煙草專賣制度ニ於ケル煙草製造ニ徴シテモ明カナルベシ
- (ハ) 内國ニ於テ原油及製油ノ收納行爲ナキヲ以テ收納價格決定ニ伴フ困難及弊害ヲ避ケ得ル利益アリ

短所

- (イ) 政府ノ收ムル利益ハ主トシテ原油ノ輸入上生ジ得ルモノニ存シ比較的有利ナル石油ノ製造及販賣ニ伴フ利益ハ全部之ヲ民間ニ委スルモノナルヲ以テ專賣利益少シ從テ本案ノ長所(イ)ニ述ベタル諸般ノ施設並大規模ノ軍用貯油計畫ヲ實行スル上ニ於テモ資力充分ナラザルノ憾アルベシ

- (ロ) 本案ノ下ニアリテハ石油價格ハ民間製油會社ノ決定スル所ナルヲ以テ一國ノ産業政策上充分ニ石油ノ安價供給ヲ圖ル能ハザルベシ
- (ハ) 元來原油採掘ノミヲ實行スルコトハ比較的多大ノ資金ヲ要スルニ不拘其利益比較的少シ反之製油販賣ハ石油業ニ於テ比較的の利益多キ部分ナルヲ以テ本案ハ利益多キ部分ヲ棄テ利益少ク且危険ナル事業ヲ引受クル結果トナリ策ノ得タルモノニアラズ

第二 原油供給專賣

長所

- (イ) 油田ノ買収及採掘精製行爲ナキヲ以テ採掘ニ伴フ危険ナキノミナラズ資金及經費ヲ要スルコト少ク財政上ノ負擔最輕シ
- (ロ) 原油ノ採掘及製油行爲ハ民間會社ニ許可スルヲ以テ民業ヲ奪フコト少シ
- (ハ) 制度最簡單ナルヲ以テ實務容易且ツ迅速ナリ

短所

- (イ) 本案ニ依レバ採掘事業ハ全部民間ノ支配ニ係ルヲ以テ原油ノ供給ノ圓滑ヲ缺クニ至ルベク爲ニ國防上及産業上ノ要求ニ基ク油田ノ開發方針ニ添ハザルノ憾アリ且政府ノ介

在ハ夫丈消費者ノ負擔ヲ増加スベシ

(ロ) 原油販賣業者ノ利益ノ一部ヲ政府ニ收ムルニ止マリ製油ノ精製販賣ニ伴フ利益ノ大部分ハ之ヲ政府ノ手ニ收ムルコト能ハズ

(リ) 石油價格ノ調節ニ付第一案ノ短所(ロ)ト同一ノ缺點アリ

第三 石油精製專賣

長所

(イ) 石油專賣トシテ最利益多キ部分ヲ政府ニ收メ得ルヲ以テ專賣ノ利益前二案ヨリ大ナリ

(ロ) 内國産業保護上及政策上石油價格ヲ政府ニ於テ自由ニ決定シ得ル利益アリ

短所

本案ニ依レバ採掘事業ハ全部民間ノ支配ニ係ルヲ以テ第二案ト等シク原油供給ノ圓滑ヲ缺キ國防上及産業上ノ要求ニ添ハザルノ憾アリ從テ油田開發ニ付テハ適當ナル方法ヲ講ズルノ必要アルベシ

第四 精油販賣專賣

長所

(イ) 油田ノ買收及採掘精製ノ行爲ナキヲ以テ採掘ニ伴フ危險ナキノミナラズ資金及經費ヲ要スルコト少ク財政上ノ負擔最モ輕シ

(ロ) 政府ハ之ニ依リテ精油ノ輸入及販賣ニ伴フ利益ヲ收ムルコトヲ得ルヲ以テ專賣益金大ナルベシ

(リ) 原油ノ採掘及製油行爲ハ民間會社ニ許可スルヲ以テ民業ヲ奪フコト少シ

(ニ) 制度最簡單ナルヲ以テ實施容易且ツ迅速ナリ

短所

(イ) 本案ニ依レバ採掘事業ハ全部民間ノ支配ニ係ルヲ以テ原油供給ノ圓滑ヲ缺クニ至ルベク爲ニ國防上及産業上ノ要求ニ基ク油田ノ開發方針ニ添ハザルノ憾アリ從テ油田開發ニ付テハ適當ナル方法ヲ講ズルノ必要アルベシ且政府ノ介在ハ夫丈消費者ノ負擔ヲ増加スルニ至ルベシ

第五 全部專賣

長所

(イ) 採掘精製販賣ノ各段階ニ於テ生ズル利益ヲ全部政府ノ手ニ收メ得ルガ故ニ專賣益金最

大ナリ

(ロ) 右專賣益金ヲ財源トシテ國防産業上政府ノ必要トスル大規模ノ石油政策ヲ實行スルコトヲ得ベシ

短所

内地油田及石油會社ノ買收石油販賣業者ニ對スル補償金ノ支拂及買收後政府ノ採掘製油設備ノ整理統一竝ニ經營上ニ多大ノ資金及經費ヲ要スルコト蓋シ諸案中ノ首位ヲ占ム之ヲ要スルニ第四案ハ制度簡單ニシテ實行ニ要スル經費比較的少ク且專賣利益大ニシテ油田開發ノ資源ニ充ツルヲ得ベキヲ以テ最モ實行ニ適スルモノト認ム但シ本案ニ依ルトキハ消費者ノ負擔ヲ増大スルノ憾アルヲ以テ第三案モ相當考慮ノ價値アルベシ

(各種專賣案ノ收支概算、其他石油業ニ關スル調査資料ハコトニ記録ヲ省略ス)

次デ大正十一年十二月開會ノ第四十六議會ニ於テモ海軍豫算ノ審議ニ際シテハ又々燃料政策樹立促進ニ關シ論議アリ海軍トシテハ今ヤワシントン會議後當面ノ處置モ一段落ヲ見一層内容充實ヲ要スルニ至リタルヲ以テ再ビ本問題ニカヲ傾注シ前回農商務省會議ノ狀況ニ鑑ミ今回ハ先ヅ海軍ヨリ發動スルコトトセリ

軍需局長ニ
政策ヲ起案
セシガ省議
決セズ
(大正十二
年六月)
(官營
官民合同)

(註) 當時加藤海軍大將首相ヨリ本問題ヲ市來大藏大臣(乙彦)ニ説明セラレ同大臣モ之ヲ諒解セラレアリトノ趣ニテ將ニ多年ノ懸案ヲ解決スベキ時期ナリト感ゼラレタリ乃チ軍需局長成ベク大藏省方面ノ諒解進行ヲ敏速容易ナラシムルノ底意ヲ以テ此際先ヅ大正九年ノ大藏省案ヲ基トシ最近ノ事情ヲ參酌補正シテ「燃料政策ニ關スル調査」ヲ起案セリ

本案ハ

- (一) 我國ニ於ケル石油ノ生産消費
- (二) 海外近接油田ノ狀況
- (三) 石油代用品
- (四) 石油ノ準備貯藏
- (五) 根本的政策ノ樹立

一、内國油田試掘調査ノ急施
 (附) 資源保存、新油田開發、竝ニ豫備油田設定
 二、外油輸入ノ調節
 (附) 内國石油價格ノ調節

三、外國石油業ノ支配

(丙) 政策實行ノ方法

(甲) 石油官營案

(乙) 官民合同ノ特權會社案

ノ各項ヲ其内容トシ政策實行ノ手段トシテハ前ノ大藏省案ニアル關稅撤廢案ヲ削除シ海軍當初
ヨリノ主張タル(甲)石油官營及(乙)官民合同會社設立ノ二案ヲ以テ審議ノ基礎タラシメントスルニ
アリタリ而シテ其ノ經濟關係ノ目論見、計算等ニ關シテハ海軍トシテ更メテ充分ノ調査ヲ遂ゲ
タル次第ニアラズ寧ロ他ノ關係兩省ノ意見ニ委スルヲ賢明ト認メタルモノナリ

而シテ本案ハ各省ニ提案スルニ先チ六月下旬先以テ省内ノ會議(次官、軍務、軍需、經理、各
局長、軍令部次長、同第二班長參加)ニ附シ中里軍需局長原案ヲ説明セシガ之ニ對シ「海軍ガ
其設備ヲ提供シテマデ此種國策樹立ノ要アリヤ」等ノ根本ニ關シ質問ヲ生ゼル如キ狀況ニシテ
議遂ニ決セズ結局右二案ノ何レモガ成立セザリシ場合ノタメ更ニ適當ノ一案ヲ研究追加スルコ
トトシ一時保留セララルルニ至レリ

(註) 右軍需局案ニ關シ同年八月深水經理局長意見左ノ如シ蓋シ石油政策ニ關シ經理局長トシ

軍需局案ニ
關シ經理局
意見
(大正十二
年八月)

テ進ンデ具體的意見ヲ提示セルハ之ヲ始トスルニ付參考ノタメ茲ニ掲グ(深水經理局長
ハ大正十二年五月志佐前局長ト交代)

大正十二年八月 石油政策ニ關シ經理局長意見

(甲案) 石油官營ニ就テ

- 一、日本ノ油問題ハ國內關係ニアラズ本邦需用ノ外油ヲ如何ニシテ管制シ得ルヤニ在リ國內
ノ油田試掘、豫備油田設定、戰時増産計畫等(海軍ニハ貯油ニ次グ重要問題ナルモ)寧
ロ之ガ補助ニ過ギザルベシ
- 二、外油ノ管制ハ石油官營ニ依リ何等ノ實效ヲ認メ得ズ
- 三、油問題ハ主トシテ重油ノ需給ニ限リ國家的管制ノ必要アルノミ燈油ハ電氣瓦斯ノ發達ニ
依リ漸次之ガ需用ヲ減ズベク又油價調節ハ平時ニ於テ官營トナス程ノ理由ナカルベシ
- 四、要スルニ石油官營ハ日本ノ現下ノ實狀ニ適切ナラザル政策ト認ム

(乙案) 官民合同出資特權會社ニ就テ

- 一、本案ノ如キ假ニ一億三千六百萬圓ノ會社ヲ創立スルモ世界ノ兩大會社タルスタン

タード及ローヤルタツチ・シエルノ脅威ニ遭フトキハ手モ足モ出サルヘシ

二、我油問題ハ平戰兩時ニ於ケル本邦用ノ外油管制ニアレバ特權會社ヲ創立スルモ近キ將來

ニ於テ前記兩大會社ト拮抗スルコトハ到底不可能ナルベシ

要スルニ兩案共外油管制ノ目的ヲ達スルコト能ハサルベク又財政經濟ノ現状ヨリ見テ恐ラク
兩案共近ク成立スベク思ハレズ併シ幾分カノ可能性ヲ有スルハ特權會社ノ方ナリ若シ万々一
之ガ成立ヲ見ルトシテモ海軍ノ重油問題ニ大ナル影響ヲ與フルハ遠キ將來ト考ヘザルヲ得ザ
ルノミナラス此ノ如キ會社ヲ經テ重油ヲ購入スルコト、ナレバ海軍ノ直買ニ比シ高價ナルベ
キハ明カナレバ徒ニ豫算ノ膨脹ヲ招クヲ以テ此點ヲ充分考慮シ豫メ有利ナル條件ノ下ニ供給
ヲ受クルニアラザレバ海軍ノ現設備ヲ提供シ能ハザル旨ヲ提案シ置クノ必要ヲ認ム

希望トシテハ海軍ハ從來ノ方針ニ依リ貯油ヲ進メ又臺灣、樺太ニ於ケルガ如ク試掘ヲナシ場
合ニ依リ直ニ豫備油田ノ設定ヲ決行シ戰時ノ増産ニ供スベシ海軍ヨリ進デ現設備ヲ提供シ甲
乙案ノ何レカヲ促進スルガ如キハ決シテ策ノ得タルモノニアラスト信ズ

若シ夫レ國策トシテ今日是非共外油管制ヲ遂行セントナレバ現在ノ油ニ關スル官民分立ノ組
織ヲ變更スルヲ要セス財政ノ許ス限リ日本政府ガ直接或ハ間接ニ確實ナル外油會社ニ出資シ

更ニ海軍ヨ
リ大藏農商
務兩當局ニ
提案ス
(大正
十三年)

漸次相當ノ勢力ヲ扶殖スルト同時ニ英、米、佛ノ如ク世界油田ニ外交上容喙シ得ルノ域ニ達
スルヲ最良ノ政策ナリト信ズ現ニ英波石油會社資本二千萬磅ノ大半ハ英國政府ノ資本ナリ日
本政府ガ外油會社ニ直接出資スルニ何ノ憚カル處アラシヤ

翌大正十三年三月軍需局ハ前記省内會議ノ趣旨ヲ體シ更ニ「石油政策ニ關スル調査」ヲ起案シ
順序ヲ經テ之ヲ大藏省理財局長、農商務省鑛山局長等ニ送附セリ本案ハ前記大正十二年六月起
案ノ分ヲ基トシ從前ノ通(甲)石油官營、(乙)官民合同出資ノ特權會社ノ兩案ヲ提案シ更ニ
右(甲)(乙)ノ何レモカ邊カニ成立シガタキ場合ノ次善トシテ(丙)案ヲ附加セリ此兩案ハ
外國ニ於ケル石油利權獲得ノタメニ官民共同出資ニ依ル特權會社ヲ設立シテ之ニ當ラシメ且此
會社ヲシテ其利益金ヲ積立テ内地油田ノ調査試掘ヲナサシメントスルモノニシテ(乙)案ト異
ル處ハ政府及民間ノ施設ハ其儘之ニ觸ルルコトナクシテ別ニ比較的小規模ノ合同會社ニ依リ其
事業ノ範圍ヲ外國企業ニ局限セルモノナリ

次デ軍需局ハ右兩案ト關聯シ日本石油、久原、三井、三菱等ノ各社ニ對シ從來各社ノ關係セル
コトアル外國油田事業ニ關スル交渉ノ經緯等ニ關シ報告セシムル處アリタリ

大正十四年三月軍令部出仕水谷海軍少將(光太郎)ハ石油政策樹立「石油政策要領」ヲ草シ

山下軍令部長ニ提出セシガ要スルニ國內石油業ヲ統一シ政府施設ノ一部ヲ合同シテ特權會社ヲ設立シ之ヲシテ必要ナル内外ノ事業ヲ遂行セシムルコト竝ニ石油事業ニ關スル稅制改正等ニ言及セルモノナリ次デ翌四月同官ハ更ニ右合同會社設立條件草案竝ニ之等討議ノ爲官民調查會設置ニ付所見ヲ軍令部長ニ提出セリ

同年五月財部海軍大臣ハ省内ニ燃料政策調查委員會ヲ設ケ海軍次官ヲ委員長トシテ左ノ通訓令セリ

大正一四、五、一九 官房機密第六二八號ノ二

大角燃料政策調查委員長訓令

燃料政策調查委員會ニ關スル件

一、貴官ハ委員ヲ督シ海軍所要液体燃料ノ供給ヲ確保スルタメ及國內一般ノ燃料需給ニ關シ帝國ノ執ルベキ燃料政策竝ニ其實現ノ方案ヲ考究シ意見ヲ提出スベシ

(省略)

二、三、四

省内ニ燃料政策調查委員會ヲ置ク
(大正十四年五月)

右訓令ス

(註) 本委員會設置當時ノ構成左ノ如シ

- 委員長 海軍次官 委員 軍務局長、軍需局長、軍令部第二班長、軍務局第二課長
- 軍需局第二課長、經理局第二課長、軍令部第三課長、軍需局員(一名)

而シテ軍需局ハ右委員會ヘノ提議トシテ「石油政策綱領」ヲ作製セル本綱領ニ於テハ從來ノ石油官營又ハ官民合同會社ノ方法ニ依ル政策實施案ヲ廢シ新ニ外國利權獲得ヲ目的トスル一企業團ヲ組織シテ補助金ヲ交付シテ對外發展ヲ期シ其他政府ノ補助ニ依リ内國油田ノ開發ヲ促サントスルモノナリ而シテ從來海軍ガ再三主張セル官營、又ハ官民合同會社案ヲ廢セル理由トシテ當時當局ノ考慮セル處概ネ左ノ如シ

「從來ノ案ハ將來何等ノ不安ナク所要ノ外油ヲ輸入シ得ルモノトシテ考ヘラレタルモ之レ餘リニ樂觀ニ過グルモノニシテ石油資源ノ確把ニ就テ直接ノ解決ヲ下シタルモノニアラス官民合同會社モ結局資本金ノタメニ掣肘セラレ運用意ノ如クナラザルベシ政府トシテ莫大ノ出資又ハ公債ヲ要スルコト

徳山ノ設備ヲ手放スコトハ高價ナル海軍燃料油ヲ買ハシメラルコトトナルベシ

軍需局
「石油政策綱領」ヲ作製ス、對外企業團(從來ノ官營又ハ官民合同案ヲ止ム)
(大正十四年)

諸外國ヲシテ日本ガ石油業ヲ軍事的ニ管理セルヤノ考ヲ抱カシメ感情ヲ害シ爲ニ輸出制限等ノ策ニ出ヅルナキヲ保セズ」

然ルニ超ヘテ大正十五年三月第五十一議會貴族院豫算委員會ニ於テハ例ニ依リ燃料問題ノ論議ヲ伴ヒ燃料調査機關ノ設置ニ關シ希望決議ヲ附シテ豫算案ヲ可決スルニ至レリ

是ニ於テ海軍次官ハ議會終了後左記覺書ノ趣旨ヲ以テ商工次官ニ涉議シ同年七月片岡商工大臣ヨリ本件ヲ閣議ニ提出爰ニ燃料調査委員會ノ設置ヲ見ルニ至レリ

右海軍省內覺書、及商工大臣ノ閣議請議ハ左ノ如ク以テ本委員會設置ノ事情、趣旨ヲ知ルベシ
斯テ燃料調査委員會ハ大正十五年九月左記關係當局ヲ以テ編成セラレ翌十月十七日第一回委員會ヲ開催シ商工大臣恣問ニ係ル

「我國燃料ノ將來ニ對スル根本策如何」ニ付審議ニ着手セリ

委員長 商工次官

委員 同鑛山局長、外務省通商局長、大藏省主計局長、陸軍省兵器局長、

海軍省軍需局長

燃料調査機關設置希望決議(貴族院豫算委員會) (大正十五年三月) 政府燃料調査委員會ヲ設置ス (大正十五年九月) 右設置ノ事情

幹事 鑛山局鑛政課長、軍需局第二課長

燃料調査機關設置ニ關スル覺 (一五、四、七) 海軍省

燃料需給ニ關スル我國策ヲ樹立スルハ國防並ニ産業上喫緊ノ要事ニシテ海軍ニ於テハ曩ニ燃料政策委員會ヲ設ケ海軍所要燃料ノ取得並燃料需給ニ關スル一般政策ニ就キ研究セシメラレツツアル處今議會ニ於ケル別紙希望決議ノ次第モアリ右委員會ノ調査ヲ續行スルト共ニ此際更ニ關係各省ニ亘リ統制アル組織ノ下ニ之等重要事項ニ關スル調査ヲ行ヒ國策ノ確立ニ努ムルヲ必要ト認メラルルヲ以テ概ネ左記ニ依リ調査會設置ノ件海軍ヨリ提議ノコトニ致度

記

- 一、閣議ヲ經テ海、陸軍、商工、大藏、外務、各省連合ノ調査委員會ヲ設ク
- 二、委員等左ノ如シ

委員長 商工次官

委員 各省局長級 幹事 課長級若干

(終)

燃料調査機關設置ニ關スル希望決議

燃料需給ニ關スル政策ヲ確立スルハ産業並ニ國防上喫緊ノ要務ナルニ拘ハラズ未ダ何等統制アル計畫ノ實現ヲ見ザルハ寔ニ遺憾トスル處ナリ政府ハ速ニ燃料調査ニ關スル相當ノ機關ヲ設ケ諸般重要事項ニ關スル政策ヲ樹立セラレンコトヲ望ム

(終)

大正一五、七、二、閣商第三二號 片岡商工大臣ヨリ請議

燃料調査委員會設置ニ關スル件

我國ニ於ケル燃料殊ニ液体燃料需給ノ實狀ニ鑑ミ燃料ニ關スル我國策ヲ樹立スルコトガ産業上竝ニ國防上刻下ノ急務ニ屬スルハ言ヲ俟タザル所ナリ商工省及海軍省ニ於テハ從來共之ニ關スル諸般ノ調査ヲ怠ラズト雖モ其問題ハ內國資源ノ開發海外資源ノ獲得其他石油代用燃料等ニ關スル廣汎ナル範圍ニ涉リ且ツ經濟上竝ニ外交上ノ關係ニ於テ實行上種々困難多キ事項ヲ含ムヲ以テ廣ク關係者ヲ集メ調査會ヲ組織シ各方面ヨリ詳細ナル討究ヲ行フニアラザレバ根本方策ノ確立ヲ期シ難キモノト被認大正九年以來議會ニ於テ燃料政策ノ確立、燃料調査會

設置ニ關スル建議案ノ可決セラル、コト數次ニ及ビ又燃料協會ヨリモ曩ニ政府ニ同様ノ請願アリタルガ殊ニ最近本問題ハ著シク朝野ノ注意ヲ喚起スルニ至リ第五十一議會ニ於テモ貴族院豫算委員會第四分科會ハ燃料調査機關設置ニ關スル希望決議ヲ附シテ豫算案ヲ可決セリ然ルニ本問題ニ付テハ先ヅ政府部内ノ方針ヲ確定スルコト肝要ニシテ且ツ軍事上ノ機密ニ屬スル事項ニ涉リテモ審議ヲ行フ必要アルベキヲ以テ大體左記ニ依リ關係各省ノ間ニ調査會ヲ組織シ本問題ニ對スル調査研究ヲ行フコトニ致度

記

- 一、燃料ニ關スル國策ヲ調査スルタメ商工大臣監理ノ下ニ燃料調査委員會ヲ置ク
- 二、燃料調査委員會ハ商工次官ヲ委員長トシ左記各省關係局長ヲ以テ之ヲ組織ス
 - 商工省 海軍省 陸軍省 外務省 大藏省
- 三、本調査委員會ニ幹事若干名ヲ置キ關係課長ヲ以テ之ニ充ツ
- 四、本調査委員會ニ對シ商工大臣ノ恣問スベキ事項左ノ如シ
 - 我國燃料ノ將來ニ對スル根本方策如何

(終)